青山御流

活花手引種

一

№2676
$
五冊上之

347

716.2 K27

桂月園泰雅先生著

青山御流

活花手引種

全部五巻

東都　灌華堂藏板

自序

蓋聞天者缺酉子地者不滿卯午方圓險夷共屬乾坤萬物爲其氣被覆載而自象乎其形是以爲揷花之體也高低斜正則南北之極長短屈伸準陰陽之度量以爲左右前後輕重繁瘦之繩墨而紀本末早晩之等上翫于公宴加乎佳節慶賀之式下備于賓客之禮夫非情之於有情也守眞保壽與於菓

實花葉形狀將資浩然之氣養神慰意乃是花木
不言之妙榮枯盛衰移於四序之變化濃淡疎密
隨于山川風土坦然莫與物爭焉雖告諸人人獲
之未必樂焉耳日徒惛昧于名聞而心身亦奔走
于利途嗚呼人者三才之一而非靈物之長哉頓覺
此意則茅檐藪棲坐均于僊界無誓而緣于神
明佛陀弗學而遊君子之藩籬矣原夫故
正二位大納言藤原基衡卿　公務之暇尤留意於

此伎濫觴于青山流溢于海外嘗羽翼於規準
本諸三教配諸五典其條律全具矣譬授于人
得一枝則求性而示順逆之理作一瓶則繫乎邪
正得失來由以述善否之故擬禮讓教諭敬和之
道焉　余汲其末流奉首肯初設會筵於東都弘
其風於丘里爾來同好數百學習積久略達其
義者居多焉遂承
園公命不擇貴賤士婦
集所插之花狀一百瓶而號活花圖大成往年

上梓布乎世雖然或其花様繁茂則意味不淺
而畏初學難辨明於是同社某專欲誘掖容
易頻來從臾故再蒙　今園公旨撰其出據
隨大小講増減應屈伸分表裏加之就幼學
所挿之體直以摸倣焉省有餘補不足所換之
始末併圖之鋟棗備便焉苟將掬　青山之滴
輩勿論都鄙遠近秉家務餘力依此集圖學
之則林野之景色河洲之意態迎模於一卉一枝
貯于瓶裏粧于席上飄香對艶則雖暫時手技
其娛豈盡乎斯哉

東都桂月園吉尾泰雅謹撰

寛政十二庚申年
孟春穀旦

さより折にふれ時に随ひつゝいつれなるをうしき
ふしをなきひとにあはれをかけておのつからあはれなるふ
まれに深くる本ながれ絶えぬとかるゝかりをくて
よのこころさへ知深る中よし深紀野山乃花を見ても
ともけんくとくもきものゝはまのせをそれ么
くらしきさふ山乃桜をもしろの里山れもみちりて
ありかめてむさしくるあに遠とはすらやひにくれをを
の梅家師桂園にふけましがかしてきに流きの
をまさとをお深くのしおれ給けるすゝもとを弟子
ようてのこふさようあるにのそひまえてもとくのて
かくらかまうらくしくしくらしくと書添え

おくれまじくとかつと思れよりしうらくもとしつゝ
いせをのあまれとくらしふらぬふさきうゑふかのうき
ゑれくうちおまうらひまねひもんふに難波女紀をある
ほしらむとしもおもひ侍りぬにいふらつゝも志みのすみ
こゝなりむしくとを深やまのなしくとなるまゝかす
相志くれ志ひてそのうし哉てゝ志つさと相より
ゑつまてもく深ふらむとくとねつまちんとしひ若
安政四十二月いみきさし紀　みなもとの深うてく
しるす

活花手引種凡例目録

巻の一

○立雛箇條圖繪部分の事
○傳授大要箇條の事
○花瓶仕様并瓶中善悪の事
○五種花樹同様方并花形の事

巻の二

○稽古花形并倭漢異名等の事

巻の三

○即興花形并花瓶為の事
○床懸附書院の畧餝繪給花形圖の事

巻の四

○同社花形競稽圖繪の事

巻の五

○總傳箇條并増目録の事
○四季花園指南并遠近取合手當の事
○花道大意據説問答并生花挿字義通俗の事

目録畢

三枝四所配当の事

○凡花形の一体上に三の座を立る載相の三枝を居下に三隅の体を立中央を本位として大小曲直に随ひ疎密長短に配し三枝より形し五枝に備へ七所にまうけて出生の自然に則り離周変化となす之表ハ奥の図に依て弁明すへし

花ハ供養の第一饗応の上たる事

○花道ハ妙事ありとも不言にして顕珠の偏なく能く令を随ひ導き其心をひらかしむる畢竟邪なる人ハ則莫長ずる時ハ天然具足す祥を與へ五ふ寛く神佛に捧けて供養の第一賓客ふきめて饗応の最初なり亭主の上なる床の餝つまてなせバ流るく枝葉の塵埃を拂ひ或ハ虫の巣蝶の糸朽葉落花ホを取捨水に灌ぎ露をそらせ器花清浄になるへし或ハ席上にて客へ一瓶を所望ハ花餝る衣裳同意之

禮義を正して花入置き事

○花ハ神佛に備へ貴人にまむる床の餝なれハ其禮義を正し入置き事ハ替へ獨楽放情の慰ミとなすとても般の始に三枝の礼譲あり華ハ流ついて気府を含む象獄既にかくのごとし居神ハ常に立をも其形を移し玉ふ客来きこう次花

そのいはざればとて必禮義を濫にすべからず

花形正風并に当ることの事

○姿ハ正風を当として曲節奇巧なる体を好み或ハ異花奇品を求め又自己の未熟なるを恥ずる瓶に人の花に批判を加へ或ハ他を誹り其ハ蓋器物の器具に拘り名聞に溺り或ハ羨み我か家の法を越足事を顧ざるもの其ハ皆花神の悪む所にして此道の仇卑賤の甚しきなり是等の趣ハ功者にも功者貴賤貧富に限らず情に慎べき事なり

稽古に前後の次第ある事

○花を習ふの次第ハ先殺活の名字に拘らず瓶中に納ることの工夫専一之其執行ハ出生性に応じて至るの術を悉して瓶中に能居る時ハ其風情成易く出生に自から叶ふところ初心にて何程出生を求むとも瓶中疎略なる所あらば又枝葉を撓るハ一旦其性を損むる様なれども術に至れハ長く出生を助るなり稽古の始めより強く出生のせんさくと枝葉花を惜みき了除く事を厭ふ時ハかならず縮み其場を得ずして生涯花に苦しむなり是逆に撓て順を経るの伝なり

二種取合物の事

○二種三種取合するハ大抵木に草を取合とあり或ハ草に草

本に木を添るもあり高き低き強き弱き濃き淡き赤き白と
色あらち名実ある物を取合べし但山木に野艸実に実の粋花
葉ともに相はざる物を交るハ色あしければ当奥の図を考へし

花形浅深の事

○花形ハ基志けらむよりハ繁しきをよし枝葉満るむよりハ
おけざる不に餘情ある花も密きよりハあら枝をかさゆかし 花
風情ある惣じて花ハおゝしきなる事よりハ二重ありて其一ツを
本おげ葉隠ますゆるハ当捨り謂ありあり

真行草三体九変の事

○真ハ正しく直なる姿を言行ハ斜に横たて体を言草ハ麁くくぐ
りてたへたる右三体分れて九体となる所謂附ある後に像こし
中あり表あり裏あり水際あり引き前あり後あり等あり
仏花形ハ高さも瓶三長に過べからず以下低き物ハ出せ不但

花瓶善悪の事

○器形ハ壽根に高く水ふかく保つ物を好又ハ唐物の像あり
ともに当ての分ちたる器ハ用ひからず銅ハ馬具擂古盤の類なり
陶器又ハ飲食の具杯ハ卵盞重して果茎木根とも毒あり
根に篇しよあれハ毒艸あり総べて根茎を口に入事ある

朽枝破葉等用ゆる場所の事

○朽枝破葉等も花形の模様よろしき時ハ時節に随ひ命ぐ常
桔梗等にハ余用る場あり継母蒲浸等に至り正面木に顕にもちゆるハ
悪し何も花葉枝とも奇麗なるにまさるべし

形状花葉文質の事

○花葉文質とハ花ハ質にして文頭のぬく葉ハ文にして花
賤のことし花葉不過不及なる時ハ花状に野質の失あり花葉
より甚しき時ハ繁茂なり葉花よ密なる時ハ偏なり形状も不然り剰其の
体なき時ハ山木野州にして卑し拍挨奇巧に過る時ハ猶以てく

剪綵花なり是等の境を能く辨ふへし

手ある器物に活る枝葉の事

○籠の手舟の釣る又ハ釣瓶のたぐひ手ある枝葉木あらさる所にさけるハ
勿論さりとても手つらぬきまり手をつらぬき或ハ也遠く挿す
備てさゆる数ハ其外以む加らひ巡令に傳る事ある者後への巻にまり
の図を見て考まるへし

祝儀向等の差合の事

○祝儀向ハ勿論貴人才招請等の席ハ先大凡ハ錦葉凋れ咲時節
なりさる物ともさるいたる葉の類又ハ名悪く色香無加なる物或ハ

其花茎葉枝を折まじへみ葉摘枝末と成り不絶て志ほれえやく落
易き物故ハ用ひられず祝儀の筵に限る傳多し

掛物に對する花形の事

○掛物に待らふ花ハ絵の賛莫を主として花ハ是に准ふべし
依て画の肝要とする所ハ勿論繞て様體なからめ蒙抱所ハ厭ひさく
画きてある形り花容をも以て嫌ひ備つる類にあるべし　花枝葉梢なとの
白地に障るハ粗文なり此外心得傳多し

書院並鋪向と茶室の花心得不同の事

○書院座敷の花ハ別家の賑なる故浮澤に盛なるを専要とは

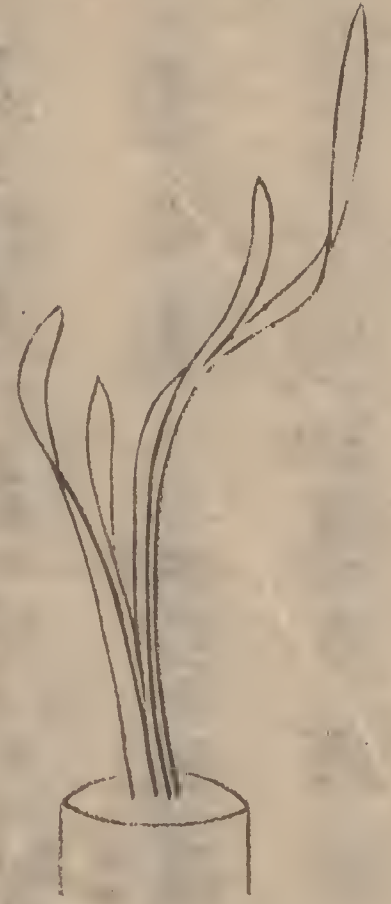
吾物も本覚に准じ茶室ハ僅由緒雅趣を主として且ひさ
るふ花も是に悪き物とも

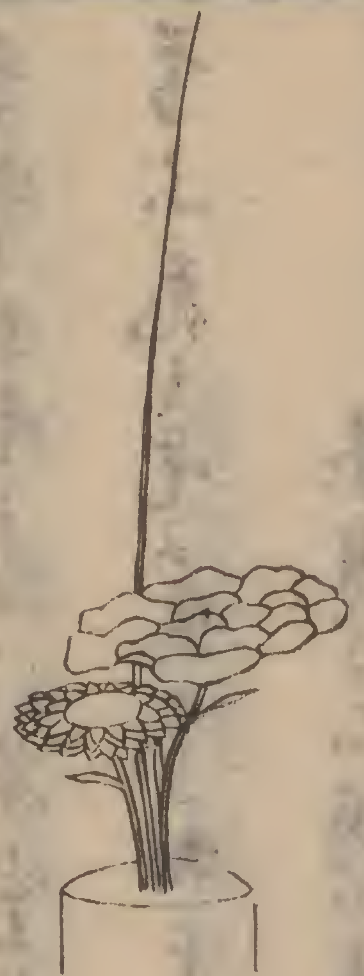
花見る心得の事

○本に餝る花ハ坐上の當呆に拘らず腰の物扇ホハ我が名坐ほとに
みな所に至花より二疊程隔蒂てみるべし　又まことに諸方へハ襟に花の
下へよる事を世の集合席ハ坐上お其他に居て勤弁ずべし

右十六箇條ハ傳書の内僅に十二を抜出て其道を説ば尚
清流の奥ぞ探ぬる事ハ都鄙遠近其所に随て傳流
傳達の人々も傳あれハ夫をによりて學ひ可へし

十一ヶ条生嫌ひの図

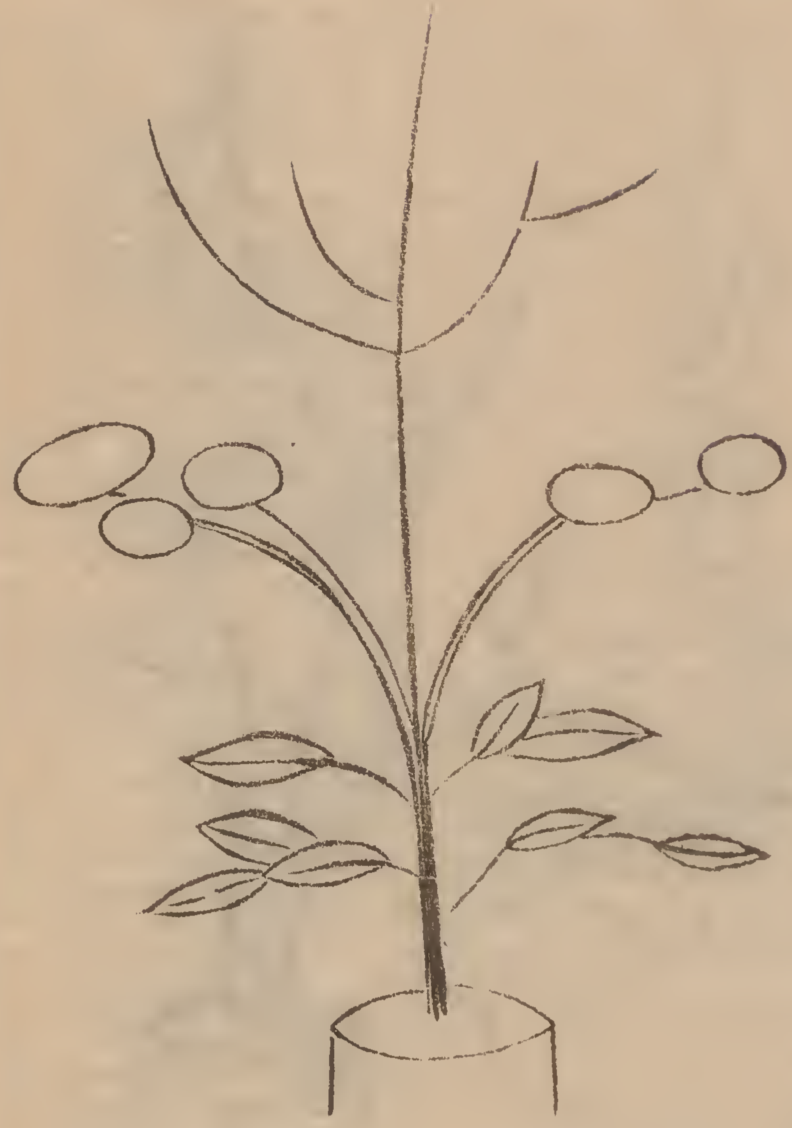




葉ある物をかく花ばかり生ハ悪し但
花斗にて也ともなくハ杜若なんどハ
春の萩の葉杯の出抛る物とおりて
補ふハ苦しからず

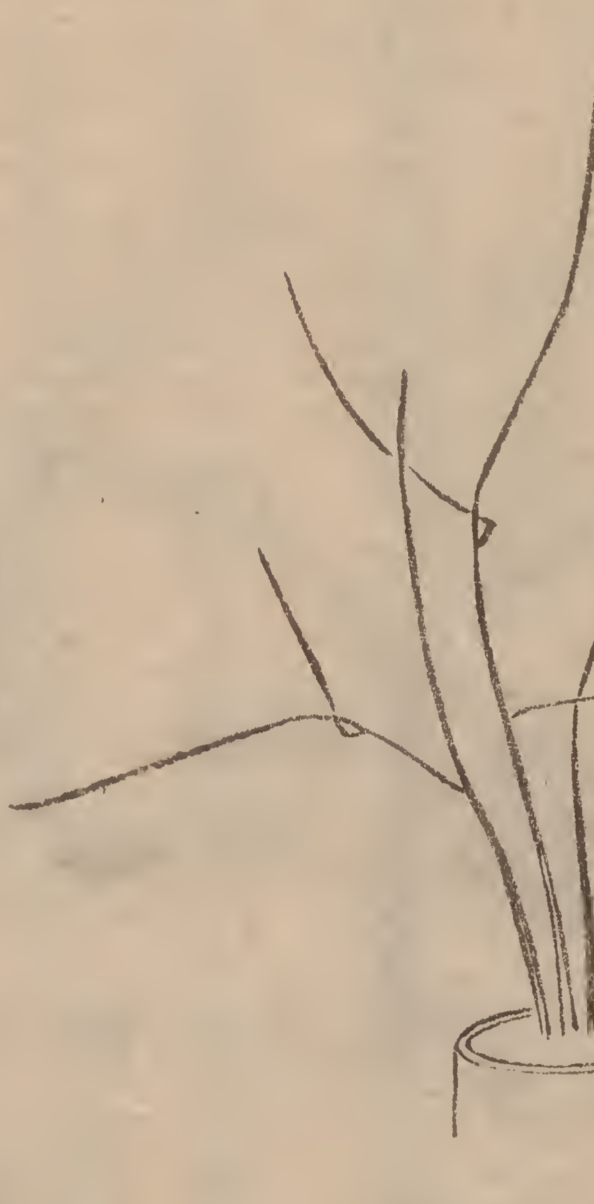
かく水仙かきつばたの葉のごとくて面白躰の
物もあれども花計にハ悪し但常無葉
或ハ花未生さる時出しの若葉又ハ花
終て後も葉の残りしを物もあり是
等ハあらい杯ハ聞ハ苦しからず

かく大輪を縦く生ハあし但前ハ
友葉ありて見ゆらし諸ならげ杯ハ生ごく
見ゆるハ苦しからず



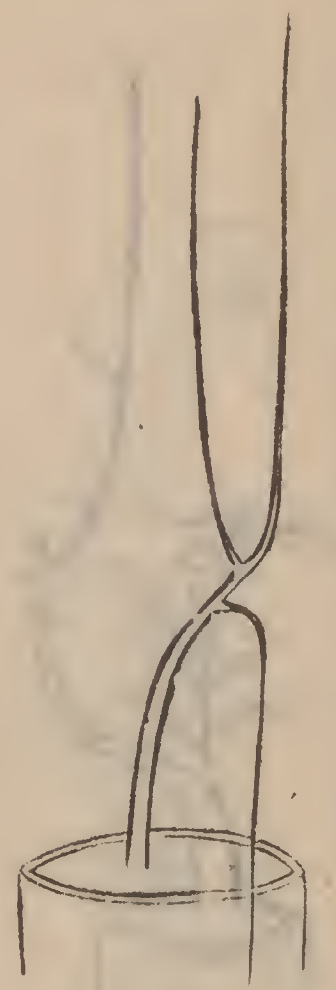
何ニ限らず須かく竪横共
ニ長さ等しくするハ悪し
但一方并ひくき間遠きハ
苦しからず

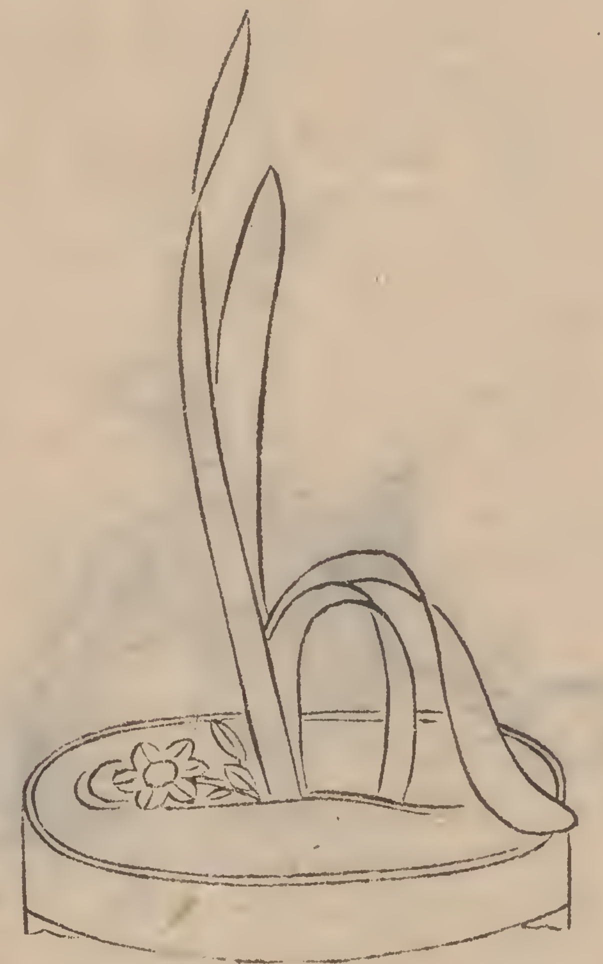
かく左右同所より出て引
張りたるごとくに見ゆるハ悪し
但厚薄ありて前後左
右長短ある時ハ苦しからず

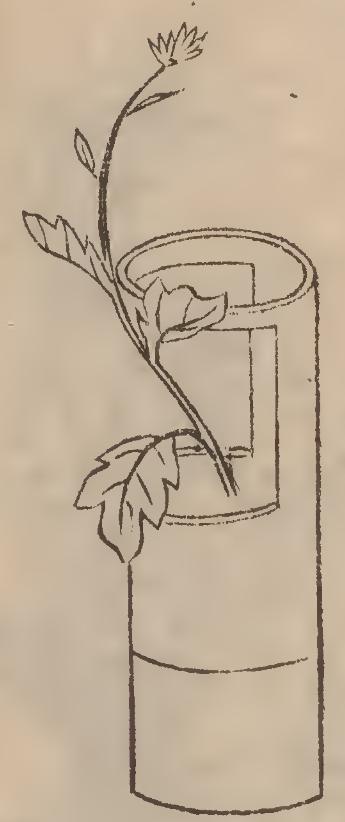


かく見きり十文字ニ置ハ
悪し但右枝の元ニて聊
そこまり或ハ目立ぬ小枝
小葉ハ苦しからす次

かく鏡のごとく花葉枝を
平にみゆる事悪し但
まるく小葉小枝ハくるし
からす次



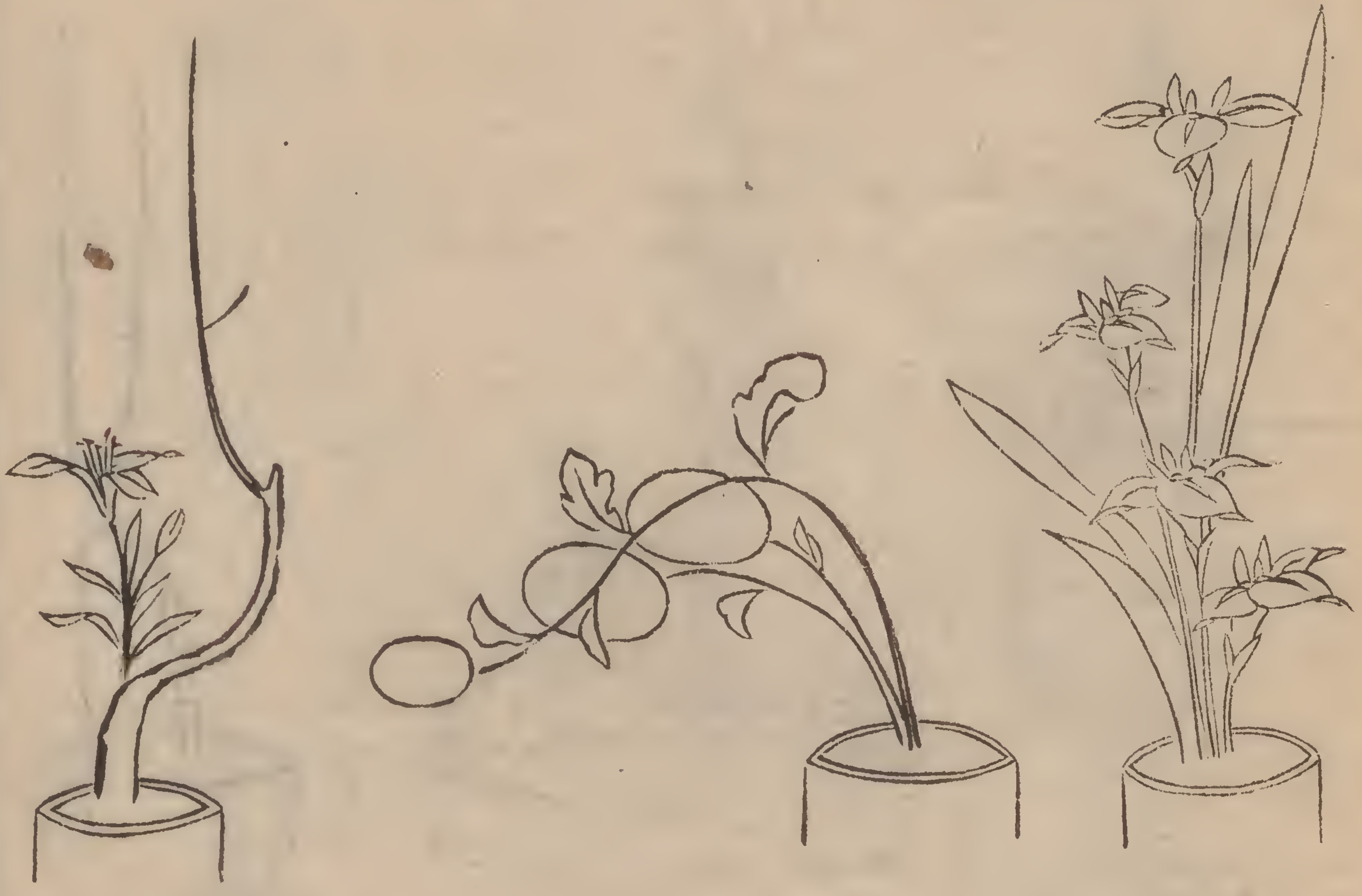




かく前後へもたるゝをいぶし
冷さしとて嫌ふなり但指の
方へもじりつるふ曲ハ
苦しからす

折花葉水ぎはにて或枝先
通りてさらにおハ悪し
但葉くき見ひもしで器の
ふちにつれて出候ハ苦し
からす

かく月の輪なりハ
ふちにさはる事ハ
あし



かく四ツより以下偶にきるハ悪し
四六八十本の形数本り但草と
花葉根分しイてきまなるハ
苦しからず

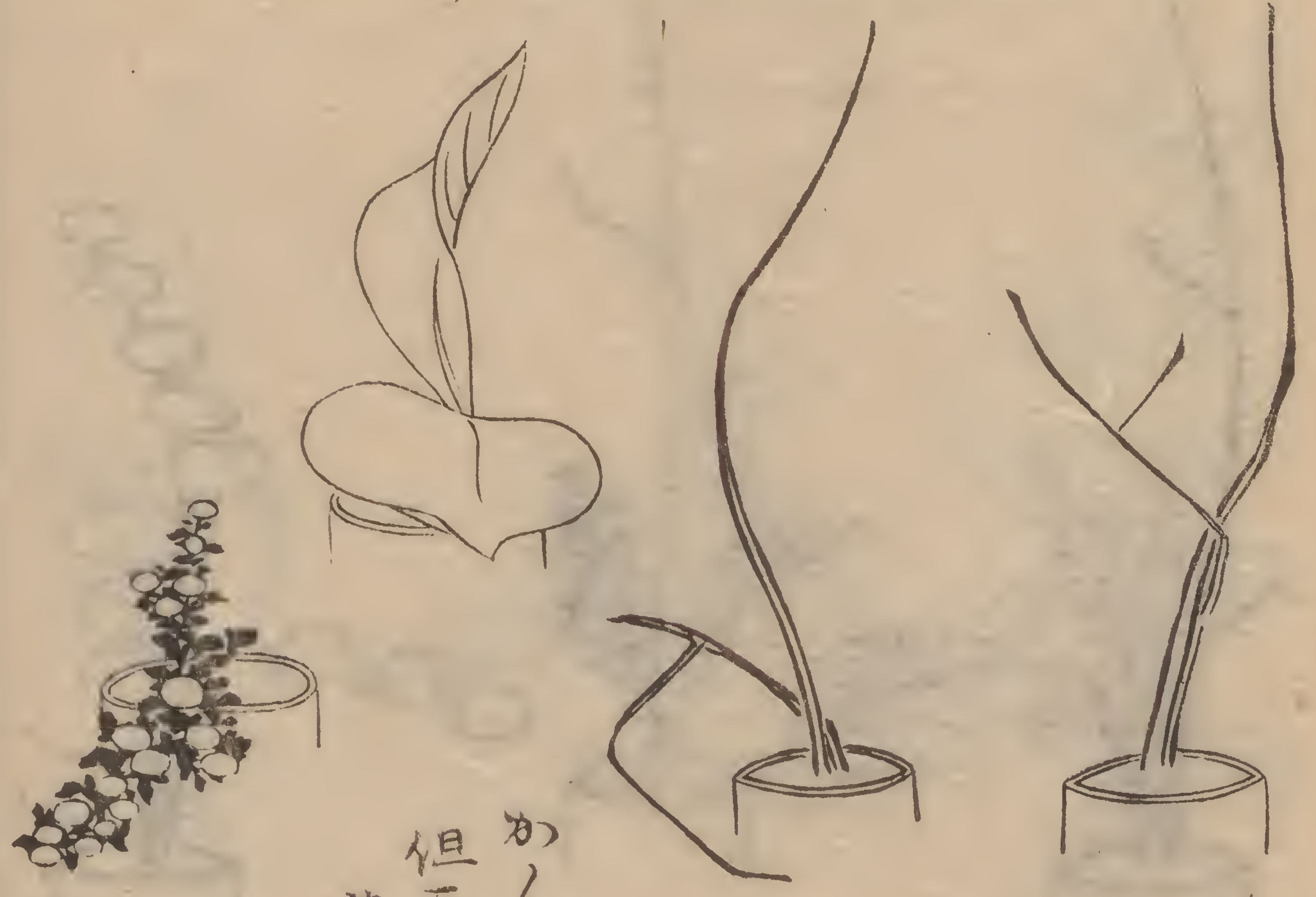
新花器枝なきのうへ盛ハ
ふせて置ハ悪し但上重と
下重は出不違ハ苦しからず

め新き花の元をまげて
やしゆへこくてあるハ悪し
但本木友草ハ苦しからず

御きんじくに行列鴈行
挿花のごとく並べる事悪し
但前後上下の浮沈あれハ
苦しからず

かく草にて木を畏て又
木にて草をつかふるハ
悪し 但一方通用物ハ
苦しからず

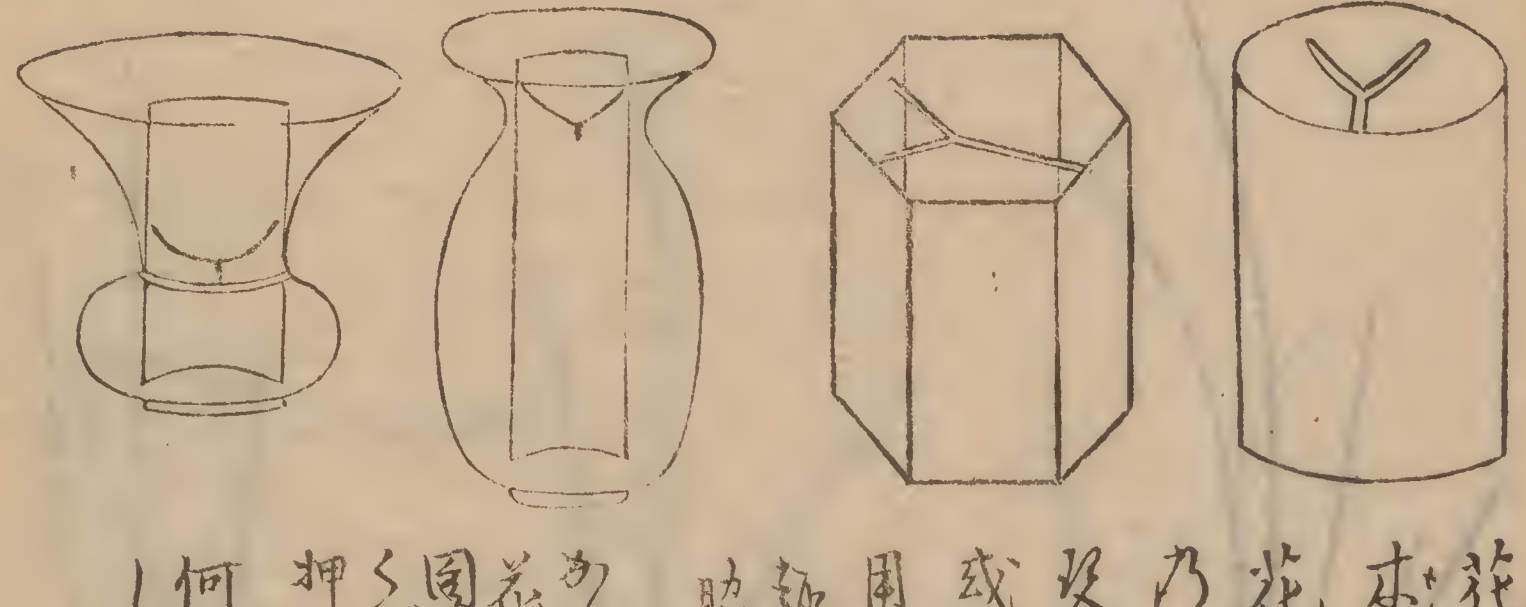
右ハ杉形し



め前より深く廻し添より
あく出る所悪し 但つるの交
がらみある時ハ手前の茎の
細く出る所を物とするべく
さる所まで前ニ出してむハ
くるし
前の次

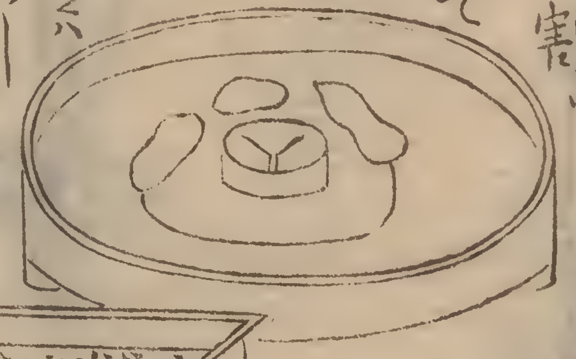
かく瓶の正面を露ハ隠ハ悪し
但平瓶砂鉢杯の向のふちのかくるハ
苦しからず次

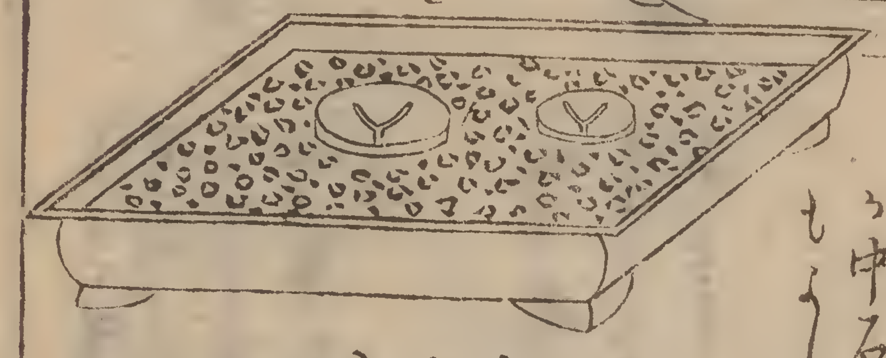
右是迄ハ初禁十一ヶ条の
嫌ひの部なり也



花配り据様かくのごとく
木槿梔萩杯の外何にても
花形おもたる枝を茎根
乃多少小准し 枝葉にまかせ
琴柱のごとく割り
或ハ古法の枝を
用ひし又茎形の
趣にあてがふ
貼くつけてもよし

かく瓶中入り隠ハ
花配りどより殺し
図のごとく中へ薄板を添し
くびれある所にて花留をなし
押へ留め器に直て考用へ
何れ如斯の器ハ茶道より
し直れるゆえなれ





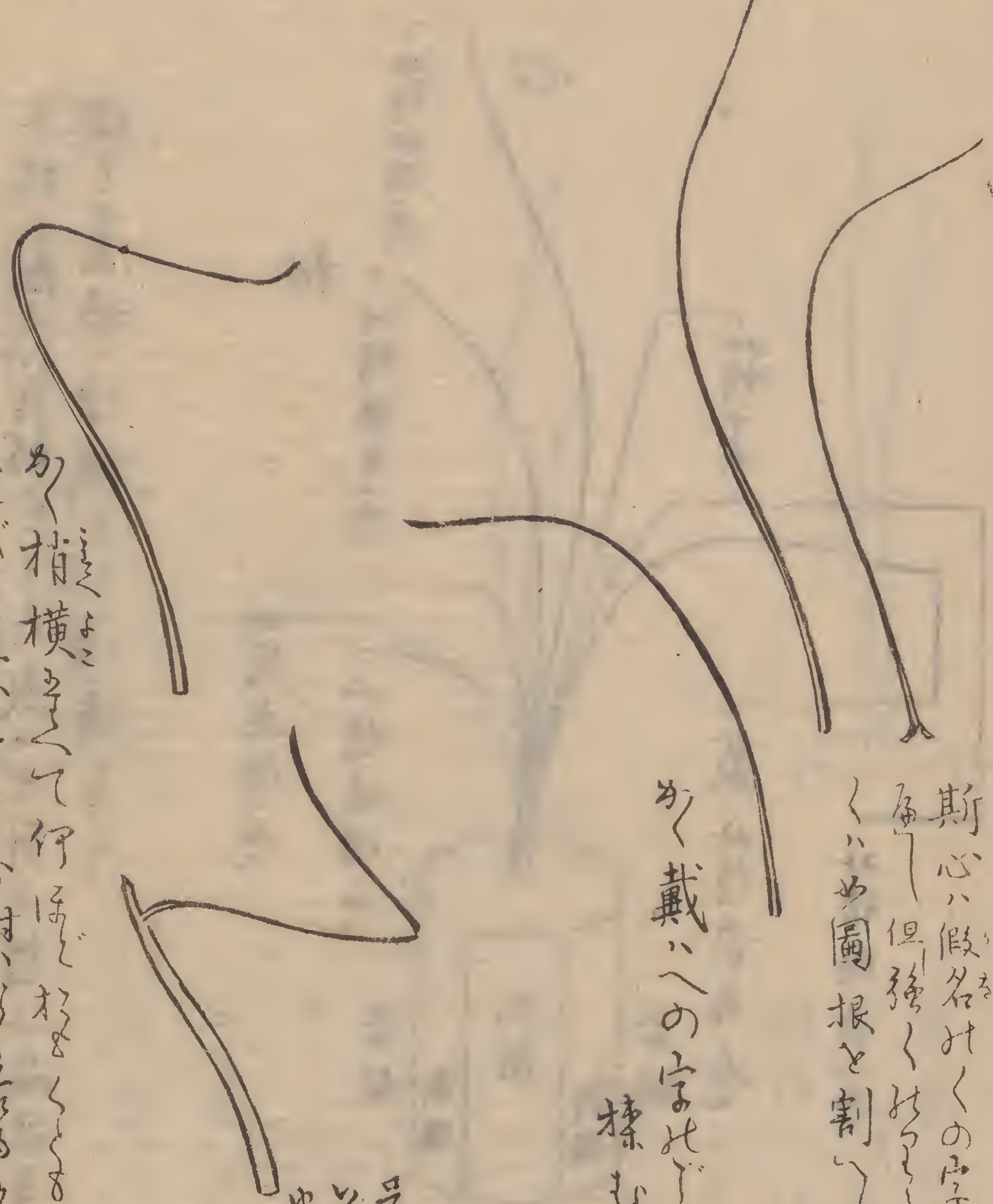
如斯合せて据ゆる手段ハ
此ま板を付けて香角く
すれハ一面にならぬ小石
の中石をよせおもしとする
もよし

かくのごとく鉢一ツハ
中まん中ニ薄板を入
又く此を添し上ニ
も出し出さく小砂
利をおかしよきも
よし 仕方あるべき

さて茎ハ直なるよろしく
其形しきれともかゝはり
ハ直なるハ又添くべし
何事も程あるべし

かく本末ともにほんのりと
まろやかなれバ数添ふ
がらし勘弁あるべし

かくのごとく向隅へ
挿みてつく様あり
大小曲直水中のた
めこゝろあるなり



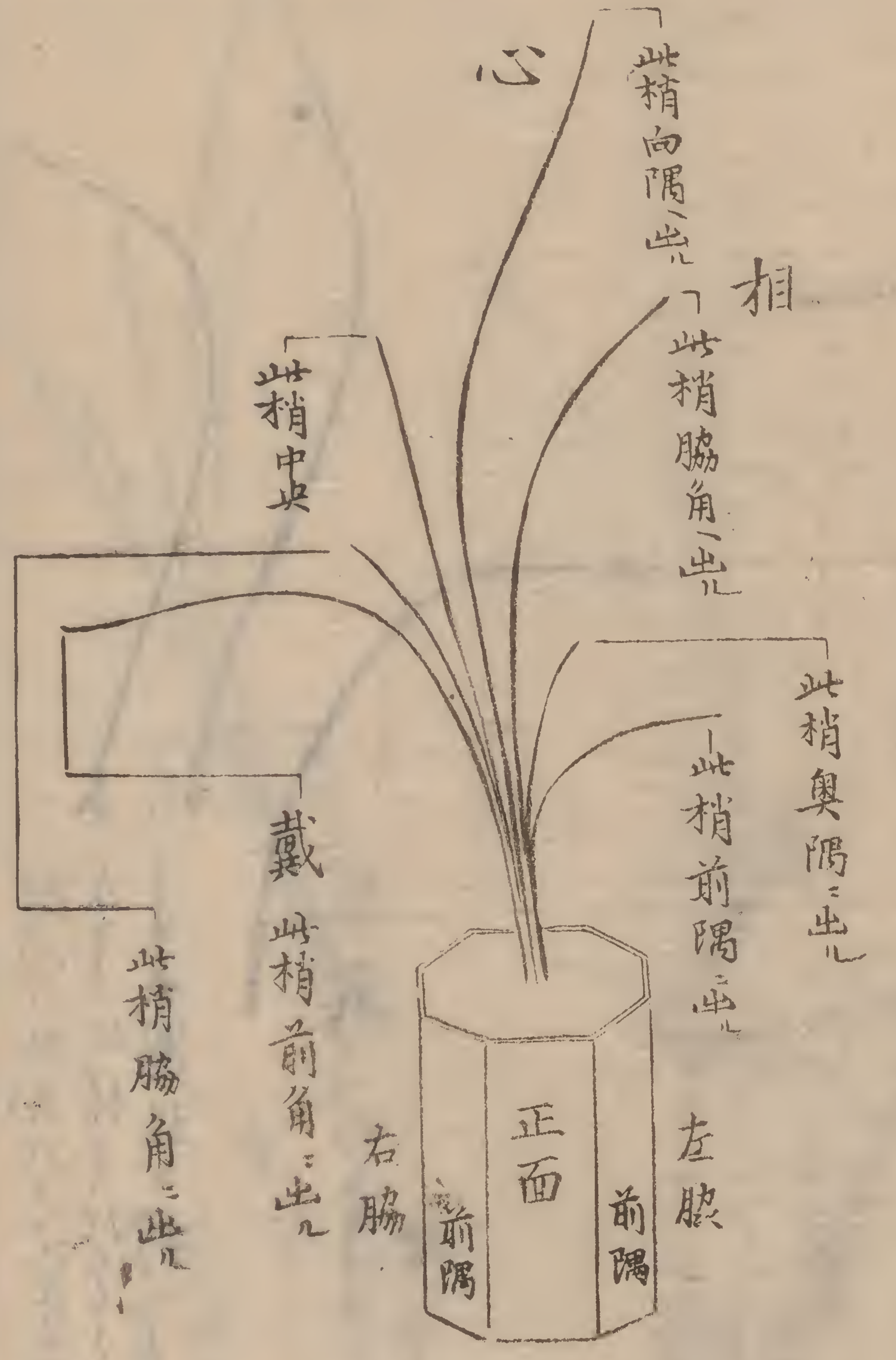
斯心ハ假名のくの字のごとく様
居し但強くおさまく居り悪
くハ此圖根を割べし

かく戴ハへの字のごとく
様むすぶよし

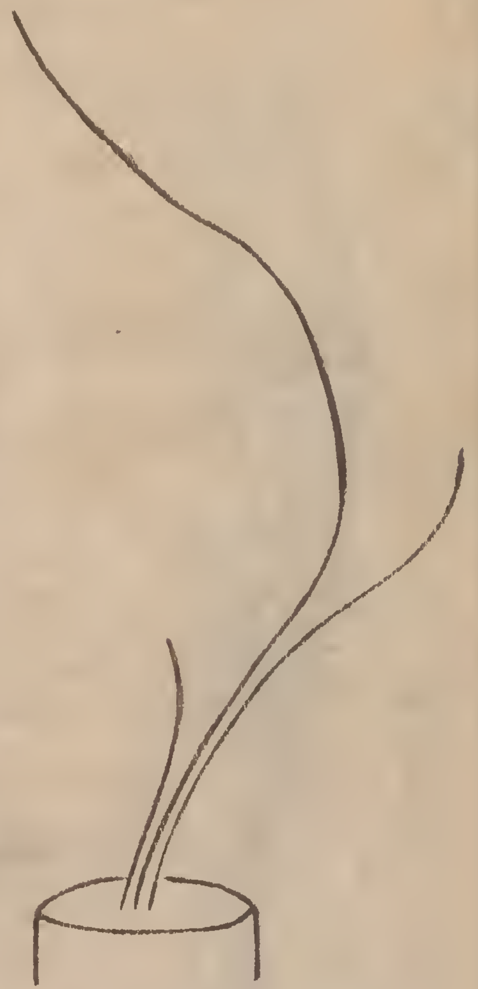
是者ハ種ろしと
とくよき元太さ
ゆくとよるべし

かく梢(こずゑ)横(よこ)よりて何ほど枝なくとも如圖根茎(ねくき)
延びて直ならむ時ハよく居るものなり

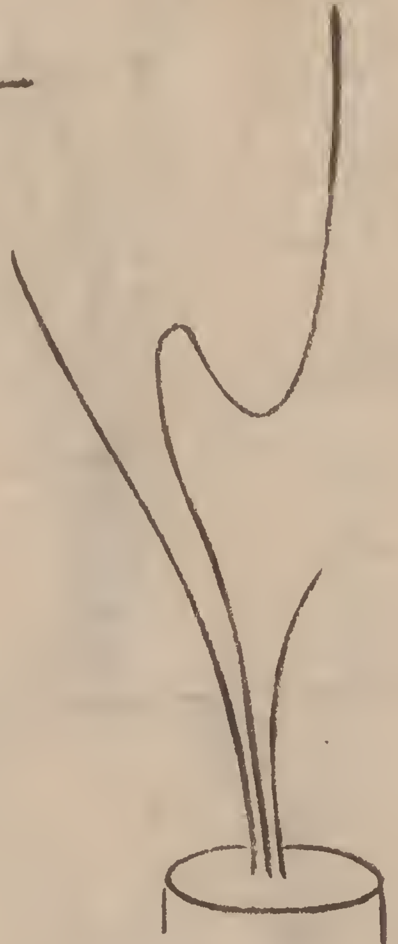
圖る所の七枝ハ花葉枝の多少長短ニ随ひ謀出屈伸ニ應じ
三枝ニ配り五枝ニ至る或ハ七所ニ備ふ尚出生の模様ニ
臨て無帯増減ニ得傳あり



草木各出生の大小
球器ニ随ひ上乃七
枝内の何ずれの三枝
ニ外と8相近き
袮ニ配ひし高下左
右從横表裏自然
ニ任せ変化時宜ニ
乗じて見計ふべき
なり深くあるへ佛も
此意を以取扱べき
ることなり



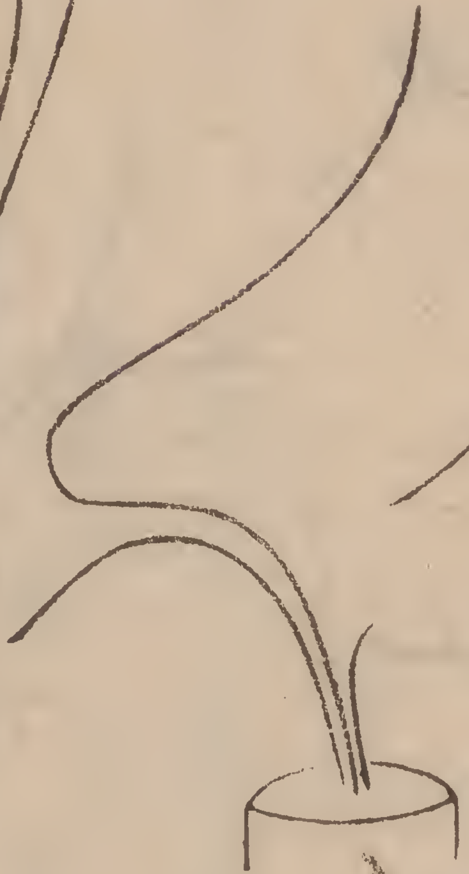
前不同



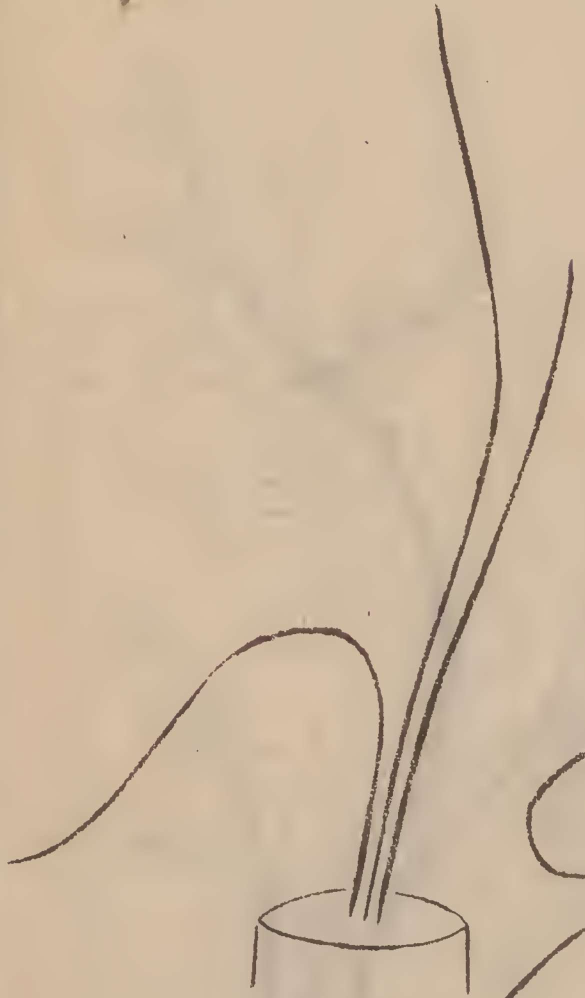
前不同

前不同

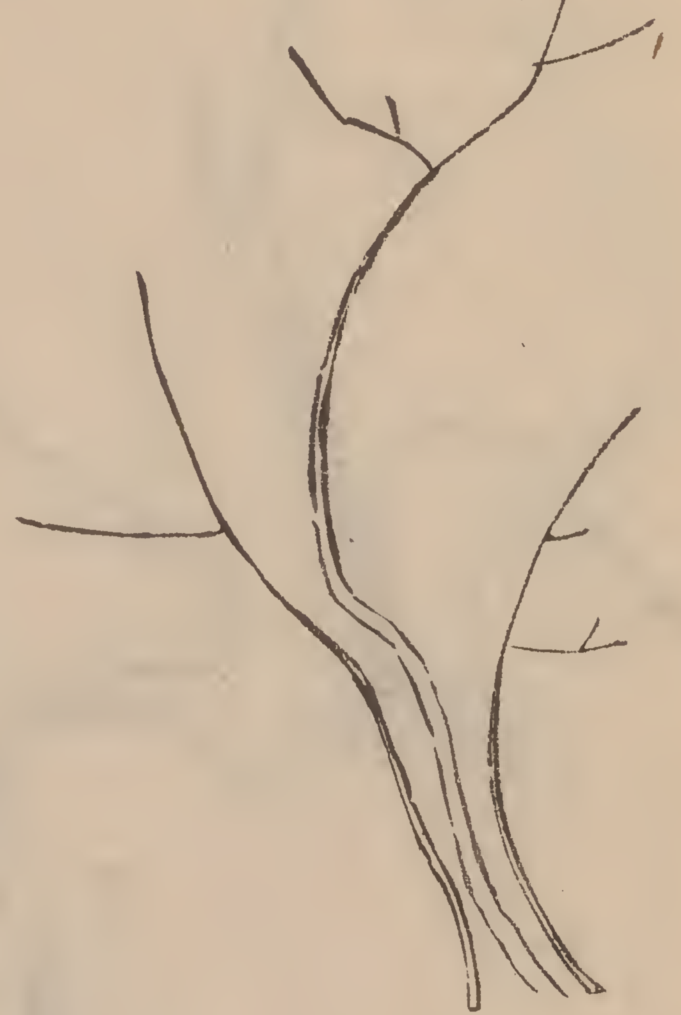
前不同



前ニ同



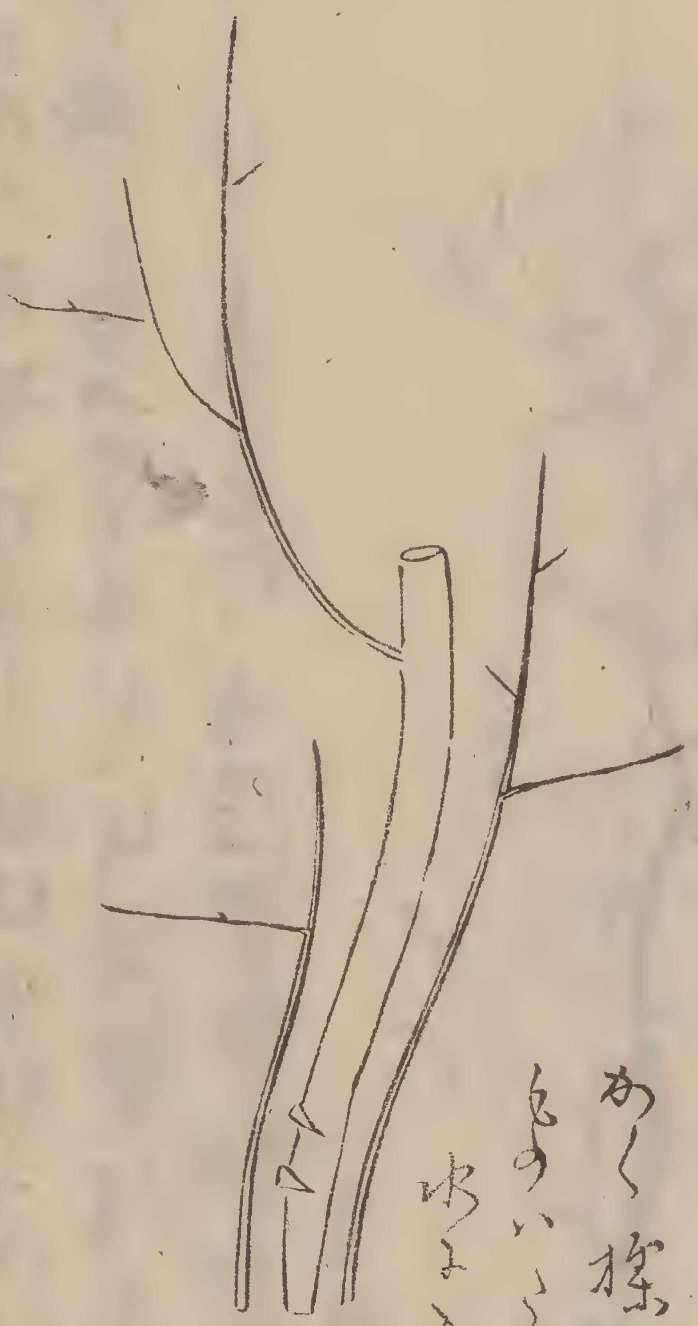
前ニ同



草木何に限らず根茎
如斯右往左往にゆる
みある時は水中あしく
水際添ずして花
形居り候尚次とえて

如此腰水中ともよく
様に揉て入るべし
水際きはへいりてそるも入へし

如斯大小よく揉ふといへども曲り
揺逆なる故水中と会りかぬるは
付左の通り揉べし



かく揉ぬれバされどもふきさき
もいとみえかくし付左のごとく
水に入る所を鋸にて挟めと
へきせんとなすむべし
水上よさへくされは
くし

右五種の花挿く揉方ハ梅椿菊牡丹水仙の五品之是ハ世ニ多く
然も盛り久しく四時ニ絶ひて他ニ依て流派の最上とし又方ニ
より挿さる所もあれと当流ハ此五種の替古を専らとして余ハ此執行の
力を以挿へき揉方花の如し

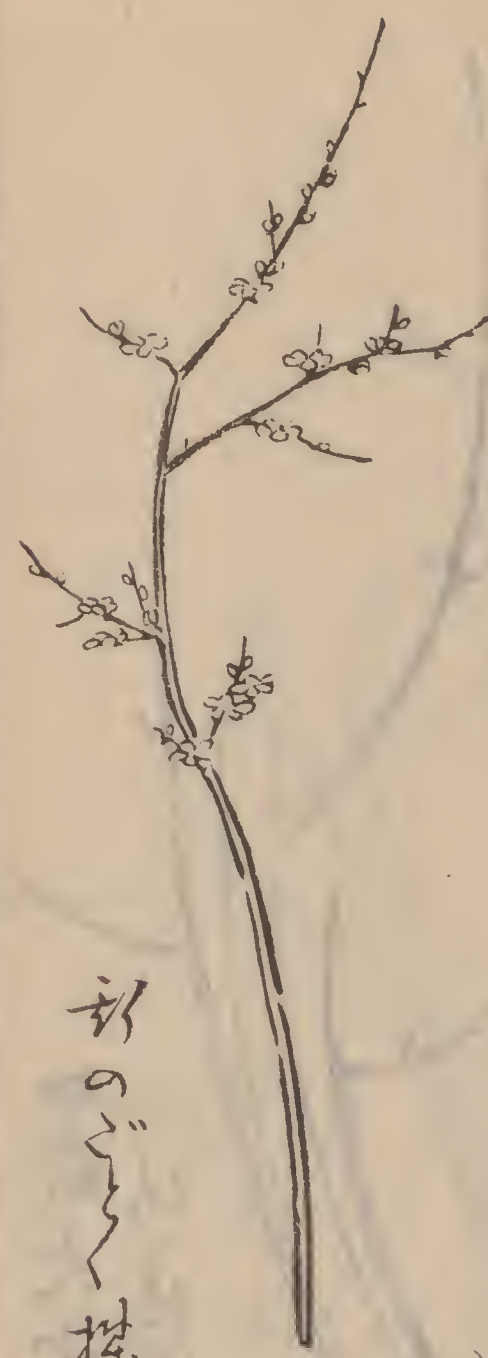
壹枝

かくもじのごとく揉へし

○ハ揉む所のしるし

△ハ剪り除くしるし

壹枝



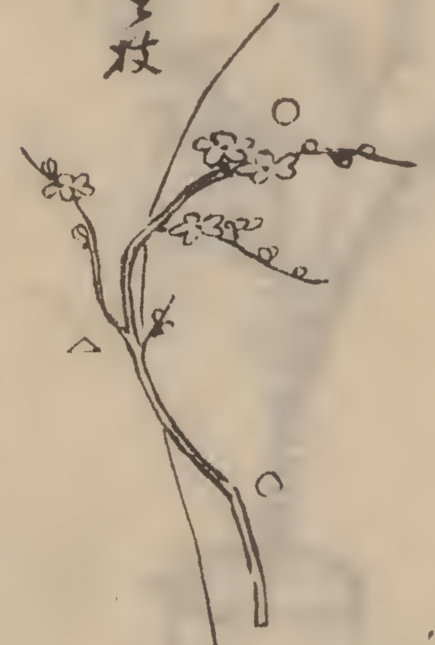
斯のごとく揉心ときへし

壹枝

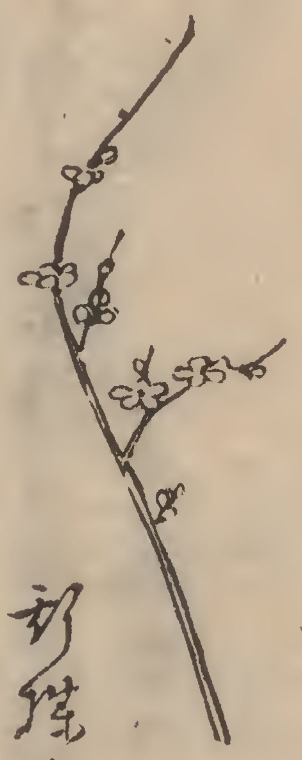
斯もの此通り揉へし

斯揉て大いに用ゆへし

壹枝



かく上下延し揉へし



斯揉まして相用へし

右三枝合して取り出す

右三枝なる花壇如斯さし入るゝなり 其外自然に
葉ある数に随ひ変化あるべし 此趣梅のみにあらず諸木ニ出
生る物をのく同意なり

此枝前の方曲あつて面白けれど
梢延びて立し様なれバ添へ居り
ともに悪し 前を除て向を用

此枝後(うしろ)の方頻(しき)りに屈
曲ありといへども腰伸(のび)て直
なる故 前の枝を除き
きるべし 外何にかぎらず
此意をもて推すべし

かく横く出来る太枝を左の
ごとく水に入る所にて小枝の出
ぶりを揉て細きぐさをむかゆ
ゑバ形よき大小変るなり

印の所を採之

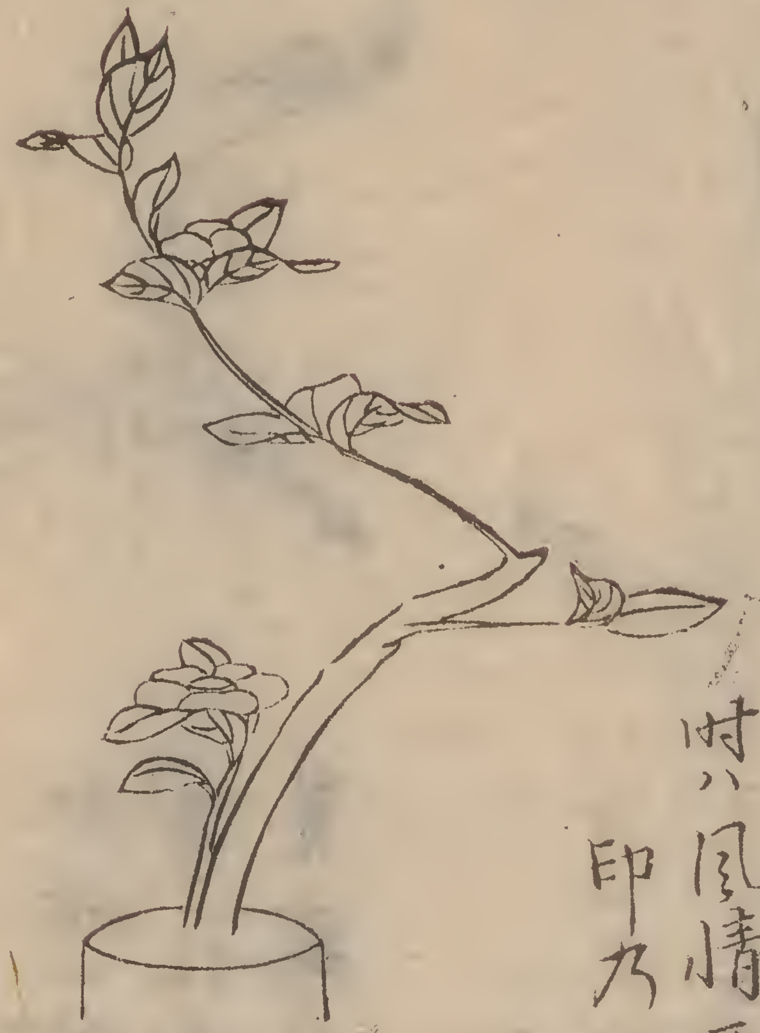
如此の枝ためて
置かゆれハ左のごとく
変るなり

印ハ採べき
所也余ハ是に
准へし

椿ハ好く風情たとへに葉並の
薄くミゆるハ悪し遊玄よくあらバ
繞く椿ハ小木ふとく小枝ニ屈し
まる形おも志添し何ほど椿ニ
相似よるものハ
各同意なり
次乃挿方の需ニ
よし別様は
巻ニ有し

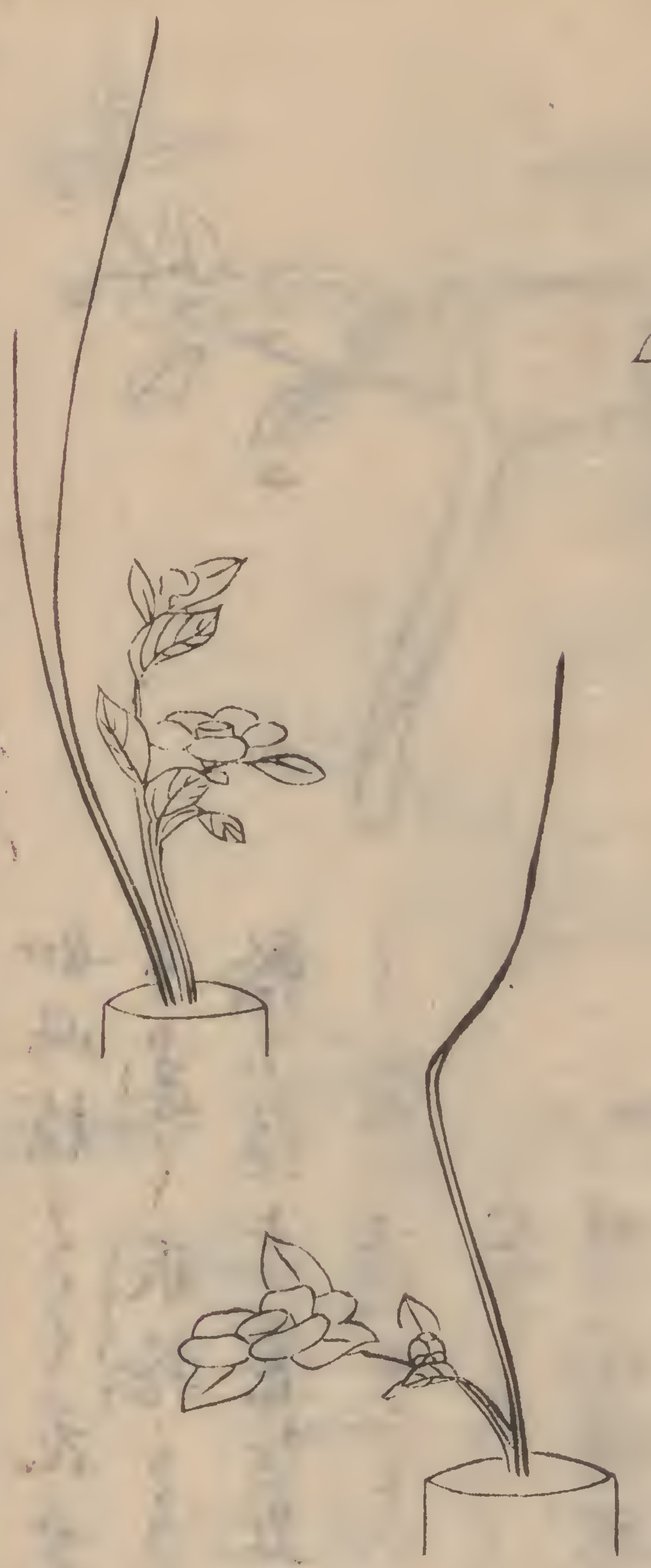
如此所く葉繁く絡で
多く挿入為し勿論
ミき枝屈曲ニして
水際揃ひかゞりき
物なりとも初心
ハ三本ぐらひを限
とさだめし五本ハ
得くより入為し

如斯椿ハ多分三枝の
内二枝ハ座まて兼帯(けんたい)
させべく甚外ハ小枝と
あしらひ小添る事
よし　別伝奥乃
巻ニ多し



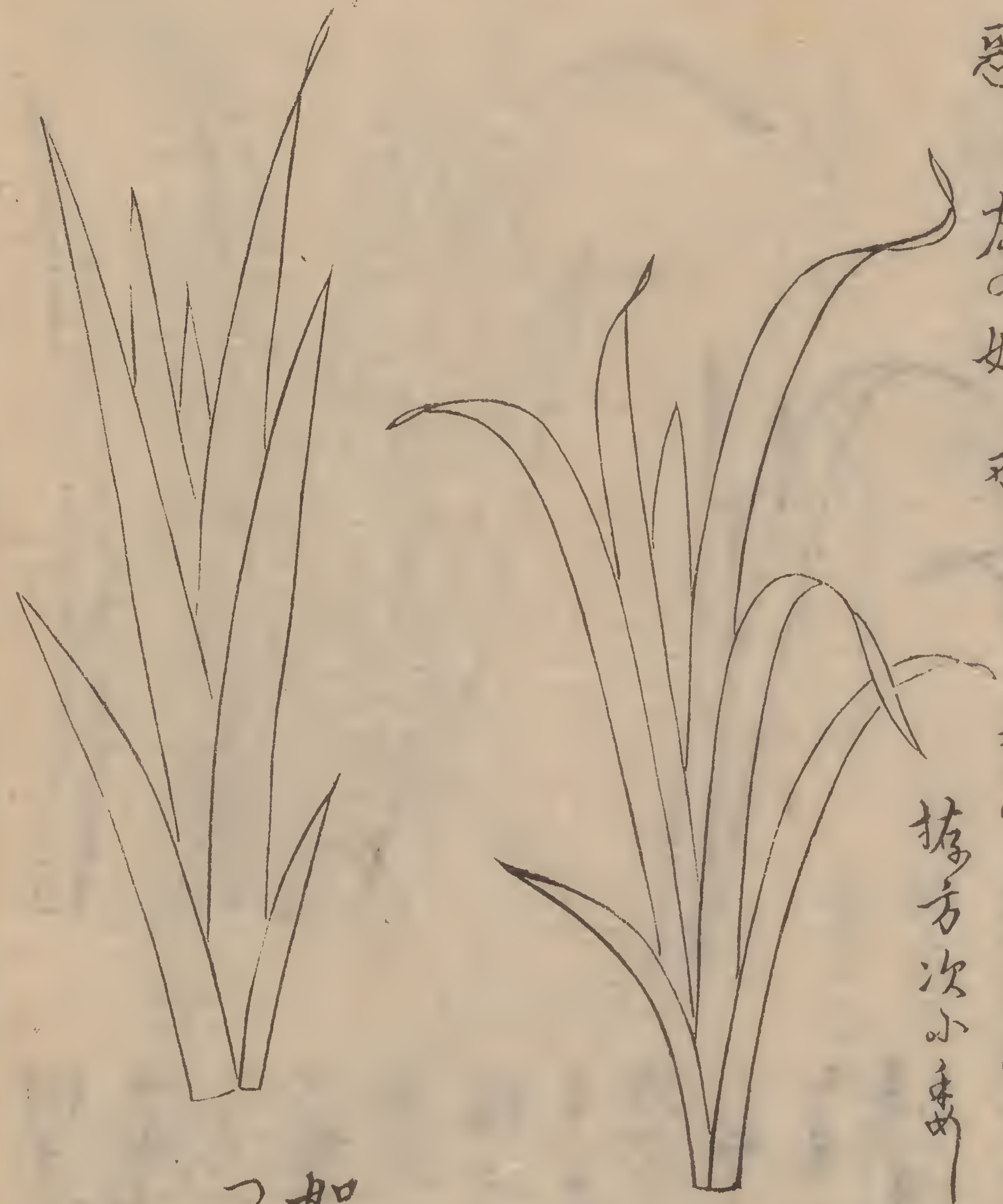
如此枝ハおほく花葉のミ繁き
ま悪く取捨ありて花を一二
輪ニ強きハ葉を五ツ枝も残
し左の通なんをいふ入まぜば
茎をおしミ葉を厭
時ハ風情悪し根も
印乃所より
剪べし

如此ハ懸瓶舟ニ
釣杯專よし又
置瓶乃上せ杯なる

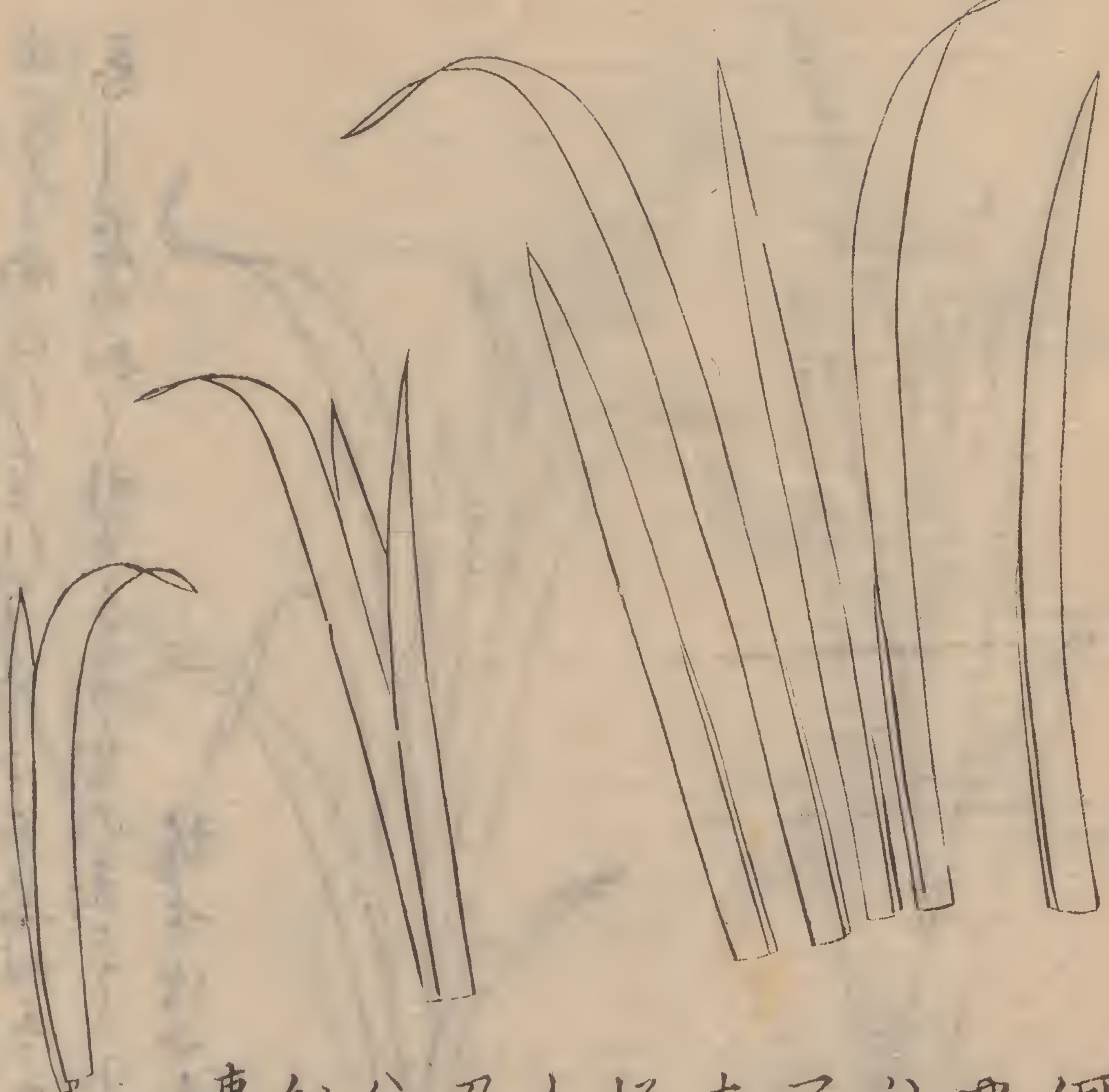


如此ハ二瓶
左右内外の
添方之
竹ハ是ニ準
べし

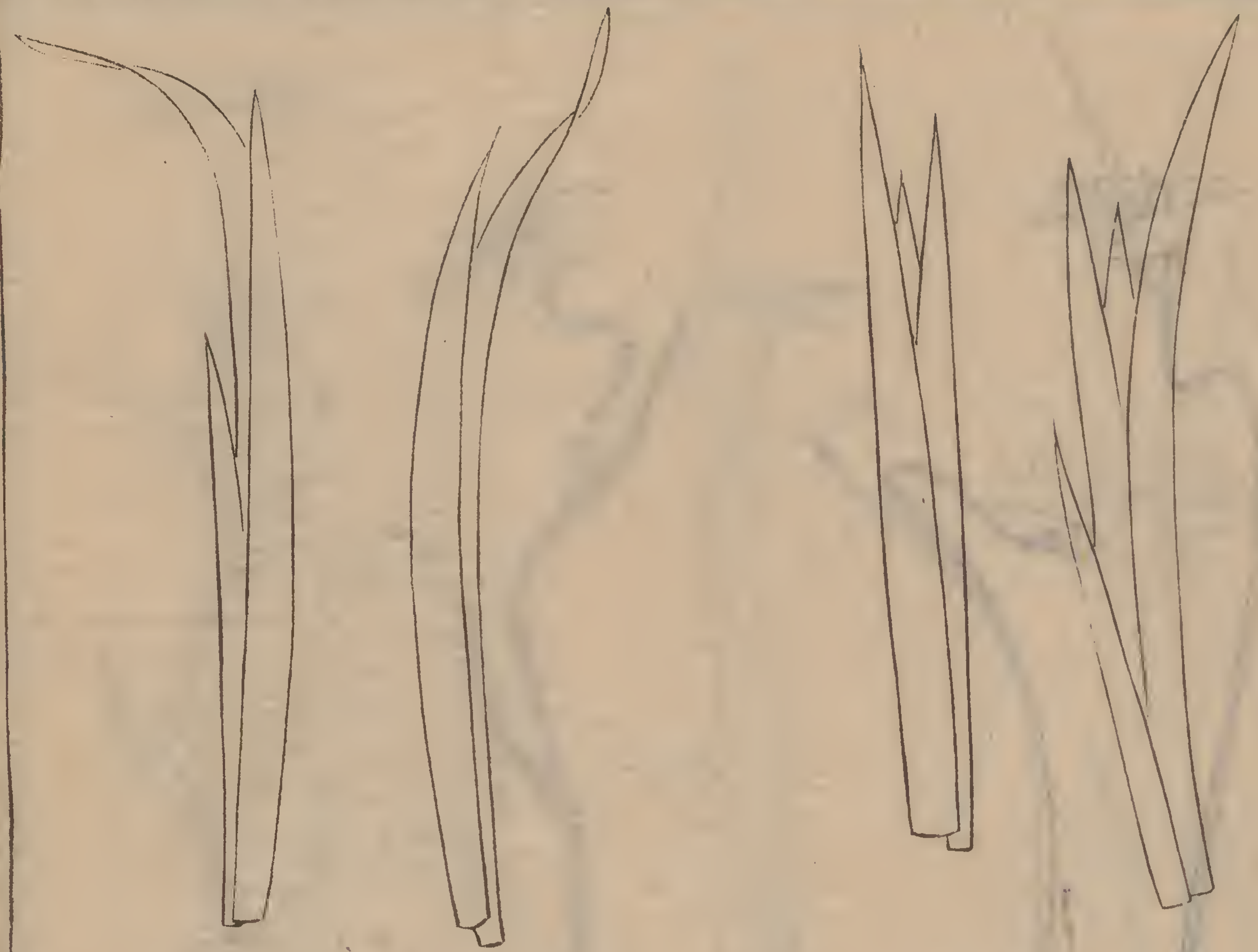
杜若の風情ハ麦ゟ葉ふよる形り圖のごとくの乃葉ハ繪形ニてハ
曲りて面白げなれども花ふ取合時ハ葉先ゟつきみだれく
悪し左の如く形るごとき葉の直なるふ志くべく次尚葉の
揉方次ふ委く見るべし



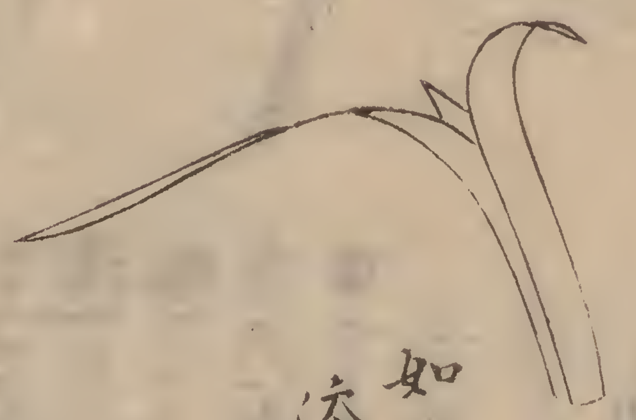
如是元より真直ふ
つき立たる葉宜し



何れ産の仕ふて八遣ひ
ゆへ志ゆかららよかろ禁
八らくなし左ふ圖の如く
一枚究もぎ放ちゆかさ
左付通長短恰好能
様よ二枚ましても三枚ふて
もくみあはせて元
乃ごとく組合為し最初
八敍しがてれまでふ
まる易出来るものなり
專多し



斯三枚も四枚も組なり
多分中をひきくし場所
相應ふ見合為べし左乃長き
葉八心の冠葉に組なり



かむり葉
くみ方

如是の葉八懸瓶
添瓶ふよし

花も曲有るハ面白様なれ共
斯本末ニ急しく絡り
てハ必水中水上共ニ難儀
なり総て杜若の茎ハ思ふ
通りニハまがらざる
物なり譬へ本直ニても
左の如く末のいつまほかに
曲つたらば葉ニ添ざるニ
かく末まで順ニ曲
りたるハ葉添ひ
揚しまなおもしろき
容も出来がたし
尚遣方奥ニ有し
何れ杜若の茎も
直なるにてハ然し

右の但葉ニ直なる
茎を交へて如是
ニ遣ふべし

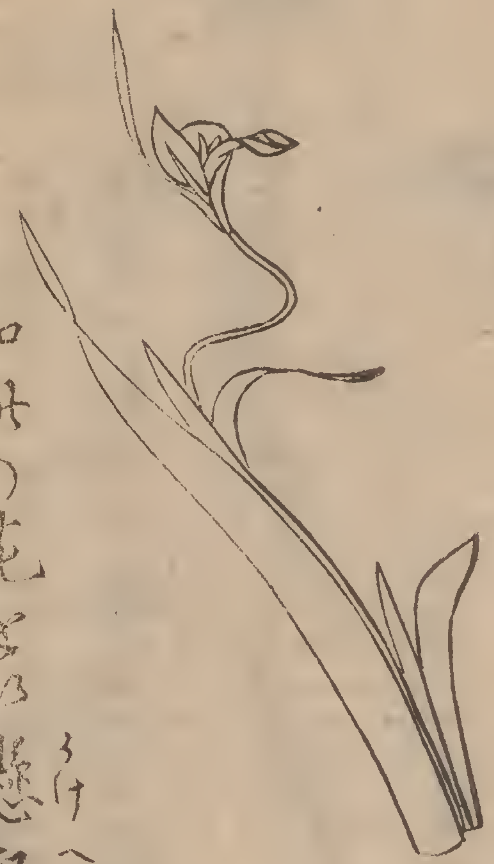
二本の挿様変化
数多あり後巻ニて
見るべし

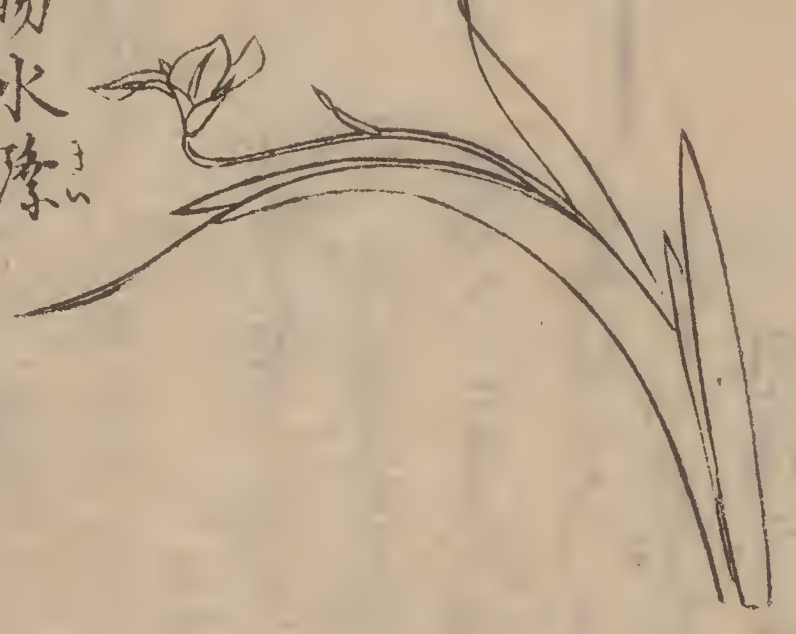
三本遣前ニ
同し

曲花遣方
別躰浅巻ニ
數瓶あり

三本遣左勝手(ひこくつ)
別体浮巻ニ
多し

右ニ同し
別体奥ニあり





如此の花ハ懸瓶(けへい)添ヘ物水際(きは)
靡き杯ニ用ひてよく[illegible]し浮巻と見合へし

大菊ハ作り方乃功者不功者にあり 殊外曲直みだりなるものなり
唯活花にハ直なるを専要とするなり 圖の如く様々に
くねり曲り或ハ二輪三りんつきたる枝乃あるものあり 是等生るハ
悪しく候

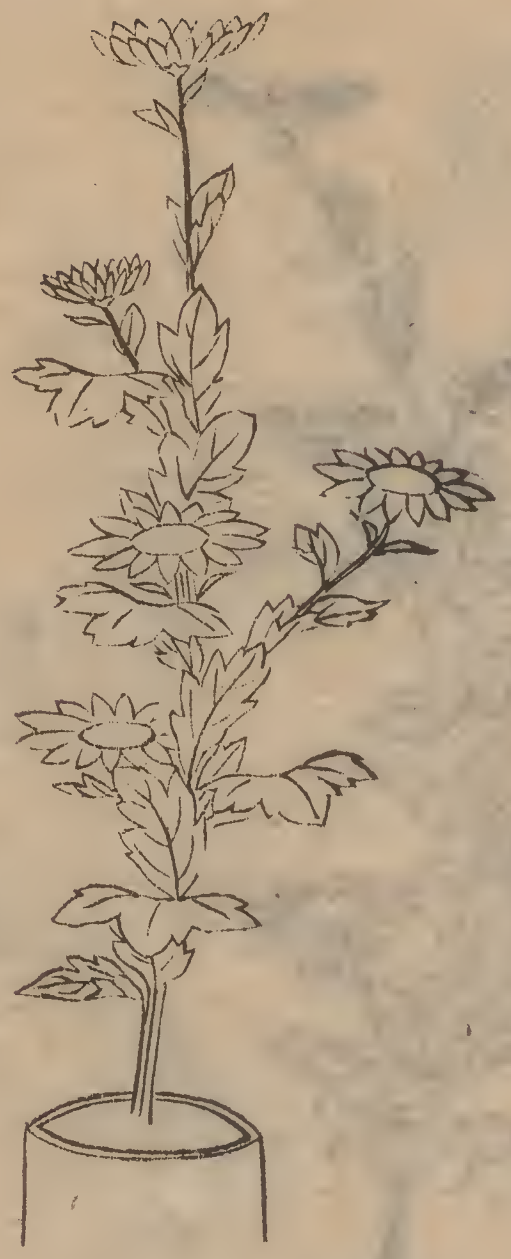
如此の花ハ直なれども枝茎開きて外の枝とまぎる

但中菊小菊とても脚よわく
乃條なるさへ脚しかに乱れ
靡きたるを峯山に掛
篭播にさしなびけハ
見しハまた面白き
風情あるなり
深巻とぞ

斯花長短よ枝乃
あしらひもさし曲り來に
出る時ハ何輪つきても
各用たるなり
活花に志ある人菊
とつくるに聊その意
味用ひてよろしひ
さまざまもあるなり

かく茎の曲りあるハ
各図のごとくなるべく
直して用ゆべし最初
よりのうちハきらむれバ
それ捨るハ茎葉を
枯らゆさも能之きられたる
まゝしなるれバ抜ざる
ものハ尤節を除けて
捨る也かくて揉為し
但是を揉るに五練一
鉄の口傳あり必
抜るべからず

右のごとく出生なる
枝まで三つ五つ
七輪までも时宜に随
て為てし茎形称し
奥の巻にあり



右に同し

作てする中菊枝かく澤山に入まじく本形累(るい)り押合てなきなし

かく一瓶枝子十分(ぶん)なひけて入まじるもまたまた枝もし深し尚籬(かき)根のこぼれ咲(さき)などハ別てゆかし

小菊枝も同意なり

右一輪つきまたは二輪つきと交へてし如是生して尚別体沼巻に多しそれには唯大通の一方といふべし

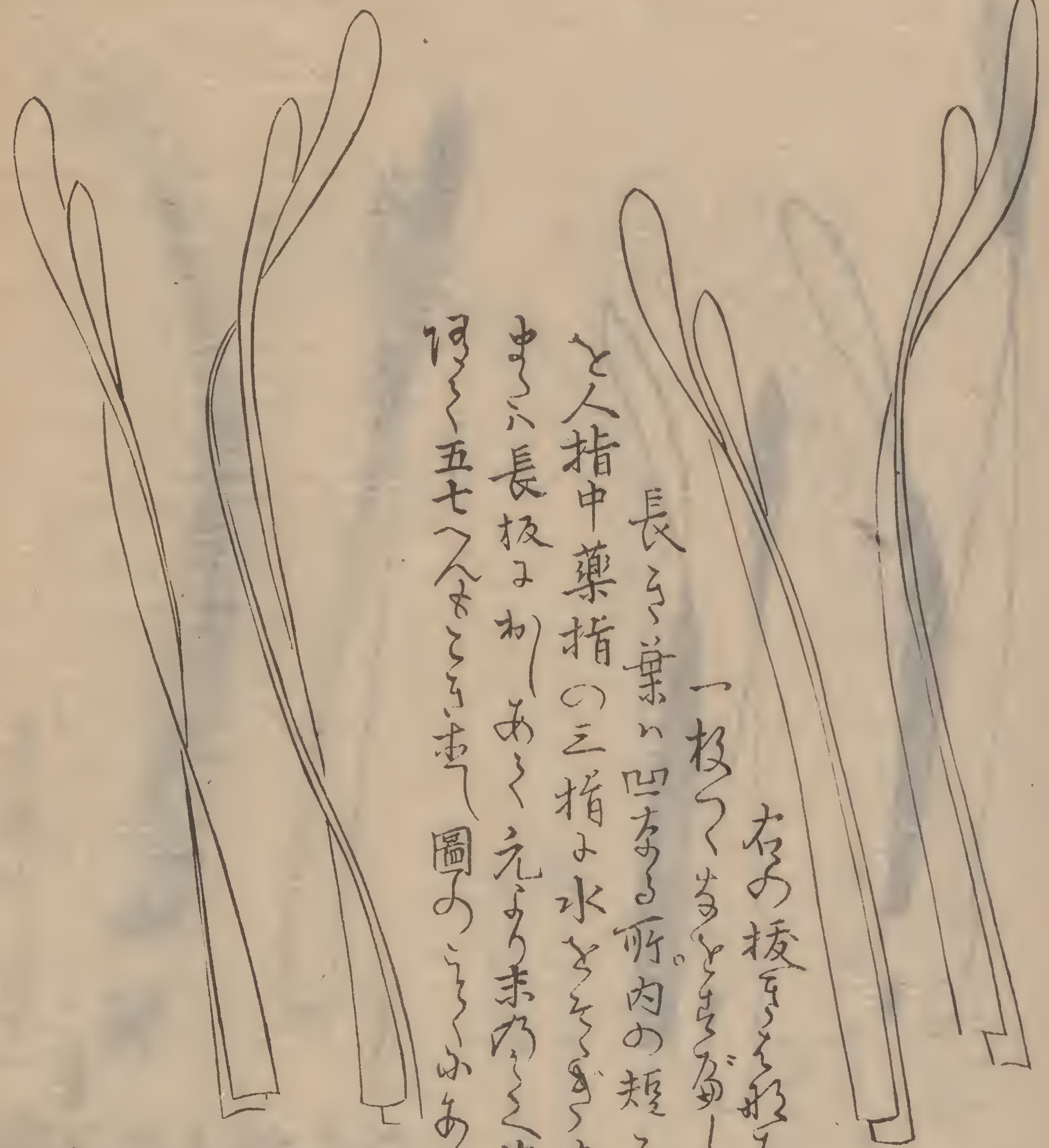
秋冬の小菊乃大凡
夏の小菊れ大凡

秋冬小菊
產の体
夏小菊
產のてい

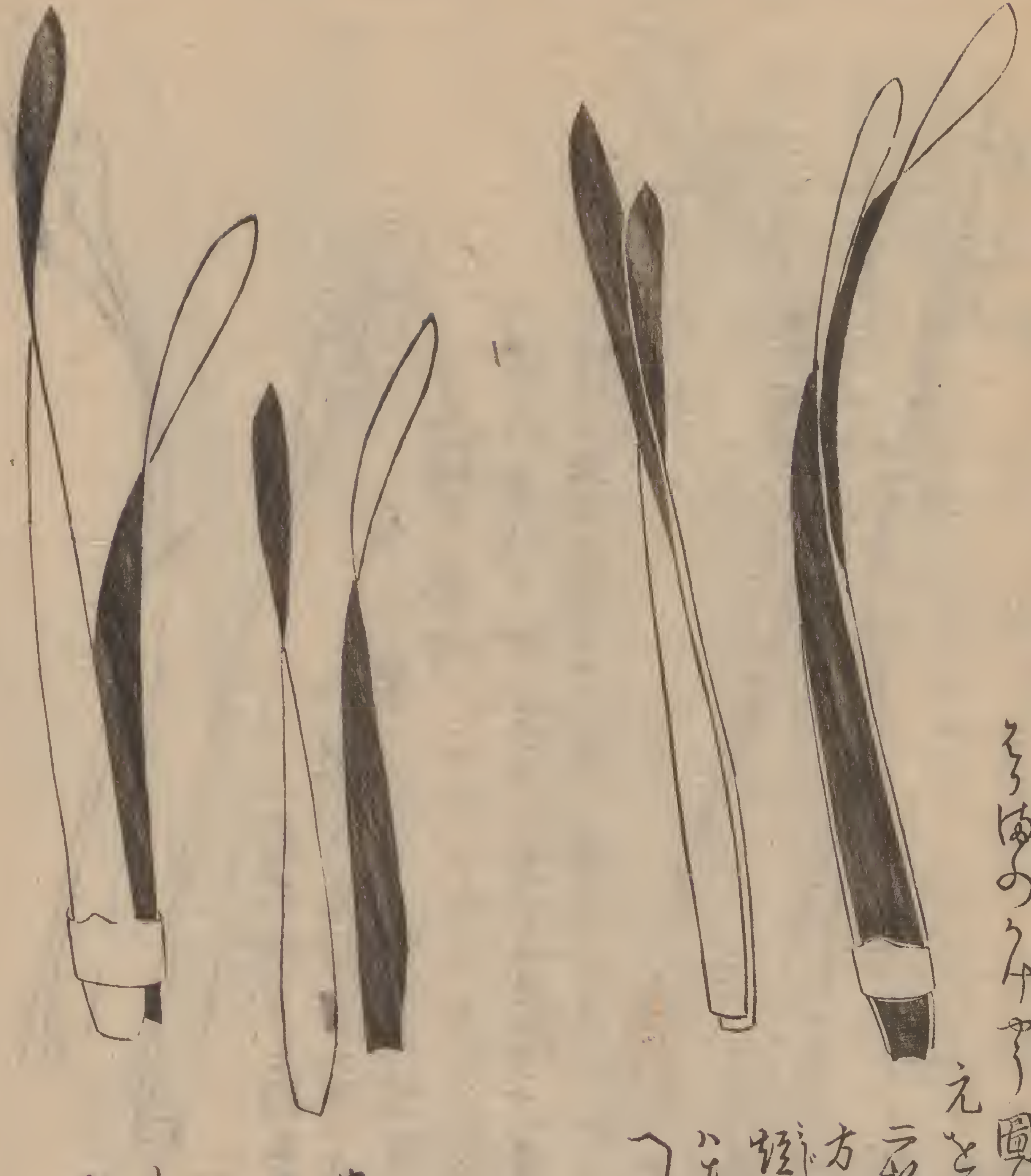
水仙あふくよれ麁ゟて直なるハすくれさるものなり
中ニ出生よく葉の腰弱く又ハよれ過てあしとり
ころさき葉あまり最掛瓶なとにある葉とつらへて強く
二もとくらい入るゝときハ格別の趣ヲ
丈高く數を
入るゝにハ悪し
次の圖のごとく
直なるを撰ぶ
用ゆへし大ぶり
美悪のある
事也

如是葉強く直ぐひとよれなるを
最上と次者一合べし茎ハちゞみて
のびざるをよしと次
あくまよれましと次として
葉性つよきハ唯ひとよれに
撰なをとるなり

水僊葉拵へハ右の一茎を取あげ白根の所を静かにも
ミ又ハ捻(ひね)りてもち茎根をゆるしりげ先ッ花をさしこまぬき
其より葉をさしこんしよめくりし最性二枚づゝかさね折りあく
ゆへ多分ハ其を始終かさね用ゆべし其の内ハ花留(とめ)花闌
がし紀器又ハ曲なる拵を遣ひもとふ節に
もちゆる也破されさる様よの事
とく魚し尤さ内
ぐらけのいざる
葉ハ二前移よ白
根を甘小なり
拵べし

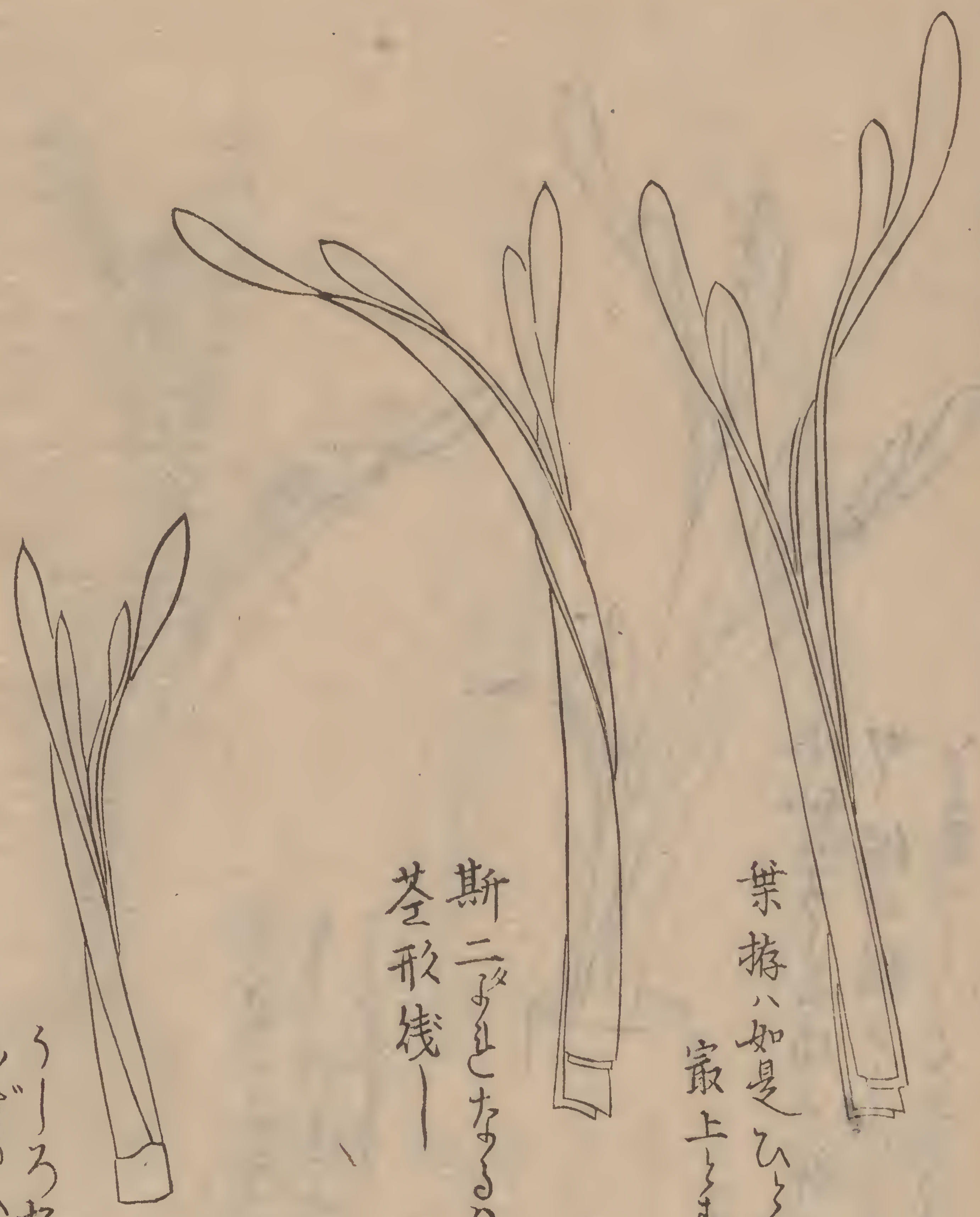


右の拵なる形ち出る葉も
一枚つくなとまさし但そもの
長き葉ハ凹なる所内の短き葉ハ凸の所
と人指中薬指の三指よ水をそゝぎなぎ茎盆ろ
まハ長抜よかしあく元より末のかく葉の剛柔に
従く五七へ余ろき事し圖のことくにあらせまき茎
茎もころしひしぐ
く葉よちからせ
用ゆべし但葉
余り縮くことに
過ることハ葉
青色ぬけて枯
艶落ぶる様又茎の
起し様口傳多し



そう中のうけやう圖のぬく
えとおし替いで
二枚合せし長き
方の葉をさし御子
短きを後ニ花
ハあとへてさしこむ
へし

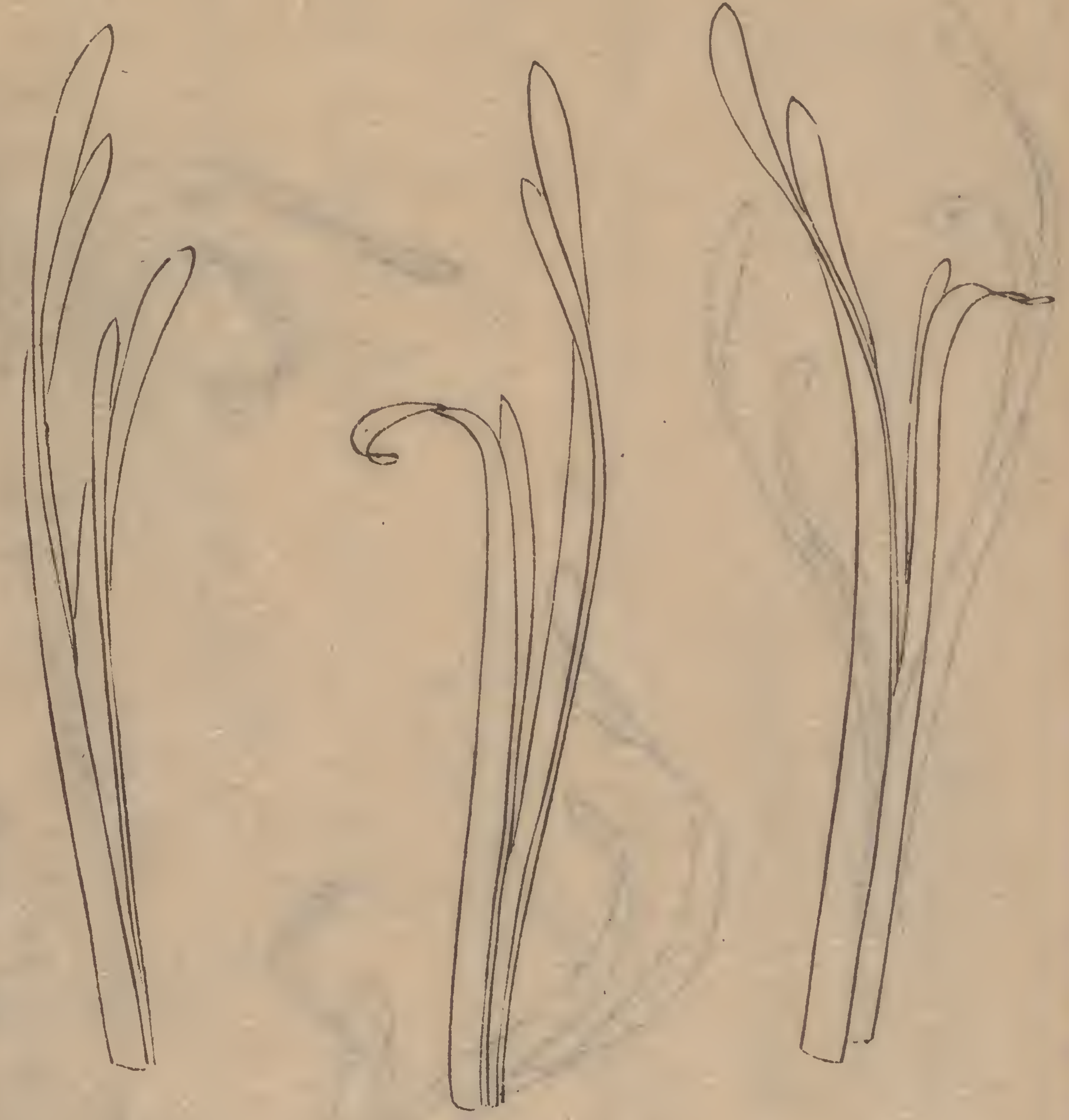
まきわく替との
長き葉より
一枚づゝさしこむ
もらし何連ニ形
拵ハこれ同様也



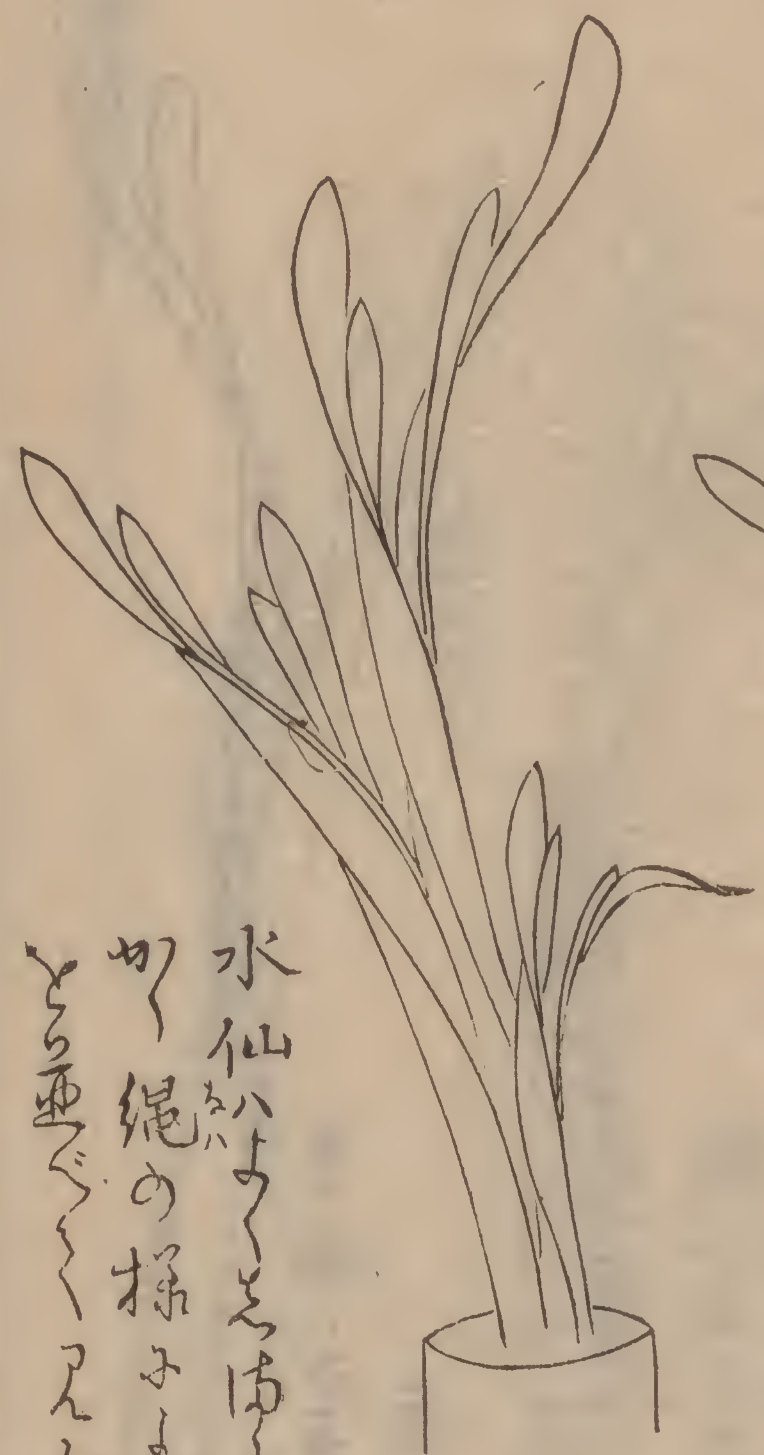
葉拵ハ如是ひらめれと
最上とさる形り

斯二ツとなるハ下なり
茎形浅し

うしろ拵子形くハ
かげゆくめしめ置
しめてもなし
後をつくへし

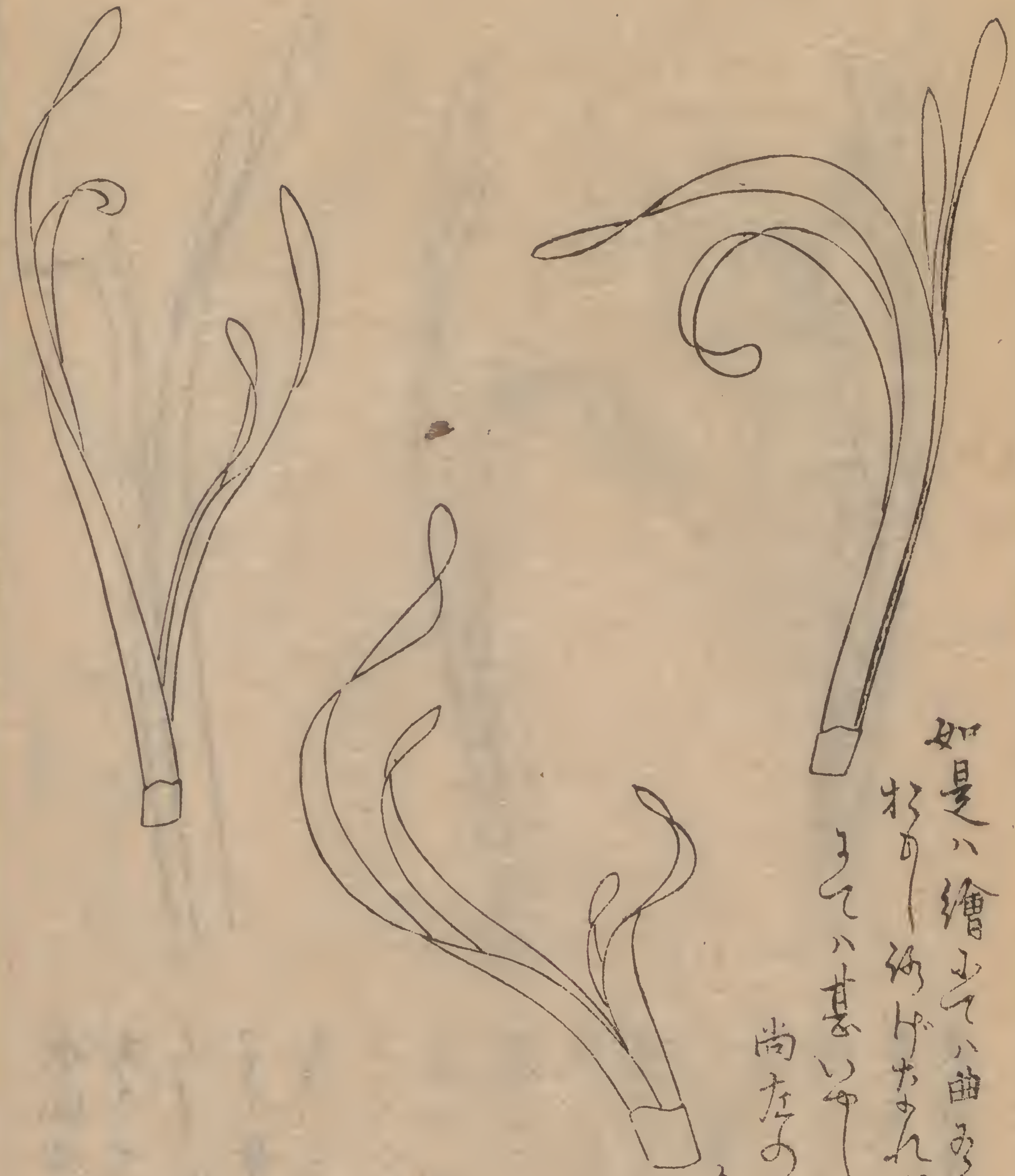


水仙ハ葉ニくせありて一様ならあらざる物之故ニ右ある葉組をもつて左りニ直し左りとも右へまはさざり因て左り勝手のみ葉組を二三茎爰ニ出して下ニ用る葉も此意にて扱くなし先花切ハ圖のごとし尚次ノ見合し別伝流巻に多し

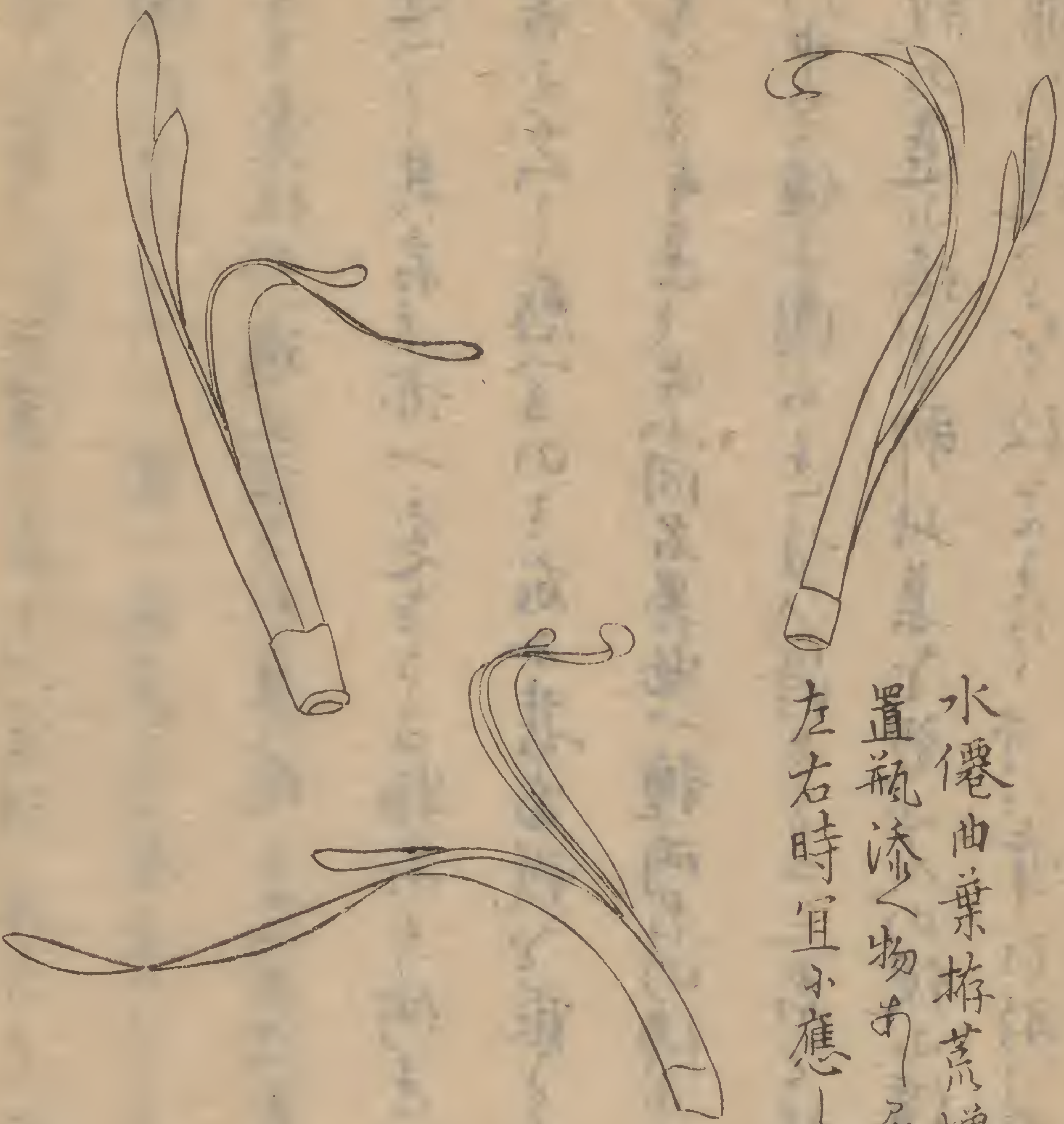


茎葉ならかくあざやかにねじ乃通ふつくしかるこゝろあるへし

水仙ハよく志ほる祢がよけ出ざるかく縄の様なれるハ此瓶と重てよく見合へし



如是ハ繪ニて八曲みくりて
形しゆげたれども実茎
ニてハ甚いやし用ゆへく次
尚たくの事し挿へ
うくをうゑべし



水僊曲葉挿蒸増如是懸瓶
置瓶添之物ありといへども前後
左右時宜ニ應し見斗ひ用ゆ

盡信書不如無書と孟子の言辭宜なるかな南畝子本草の
學行はれてより一葉一花其名審らかならざるハなし然れども以
とも變化の道追々出されハ其説も又此頃各理をも解證せ
述らるゝ其名も亦一定ならざる物あり何れか是何れか非なるか
書によつて惑へるのを人に甚多説を取て夫とも是トいひ
是とも又是ト云ふ同名異物一種両名の倭漢美品方言
乃中を僅かに聞まゝ拾ひ得たる二三名を揭け後の巻花
競の遺に続て聊此集を鬻ぐ人の便に備へ見る人不足を
補ひ違へるを改めまして幸ひ所なる者乎